
Fate/Rhapsodie Lunaire

鴉羽柳煙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fate/Rhapsodie Lunaire

【Nコード】

N5751X

【作者名】

鴉羽柳煙

【あらすじ】

運命の水面に、投げ込まれしは七つの石ノ意思。

月より来る七騎のサーヴァント。

セイバー、太陽の騎士。

アーチャー、森の守り手。

ランサー、竜の息子。

キャスター、茶枳尼天。

ライダー、太陽を落とした女。

バーサーカー、反覆の将。

アサシン、魔拳士。

七つの石／意思が起こす波紋は、やがて大きな波となり、運命の水
面（Fate）を乱していく……

……これは、異端を抱えた世界の、Zeroから始まる可能性の物
語（histoire）……

matrix | open (a) ;

システム | 起動
system | activation

全 | 蔵書 | 異常無し
all records | green

霊子 | 虚構空間 | 正常稼働
serial phantasm | green

情報 | 開示
matrix | open

分類 | マスター | ムーンセル
sort | master / moon - cell

プログラム | インストール
program | install

十 十 十

【名前】紫苑しおん 玲慈れいじ

【誕生日・血液型】4日8月/O型

【生別】男性

【身長・体重】170cm / 61kg

【イメージカラー】モノクロ

【属性】木、火、土、金、水の五大属性
アペレージ・ワン

【特技】占い、機械整備、料理

【好きなもの・苦手なもの】美、賢、醜、愚、極端 / 凡庸、中途半端

【天敵】紹興酒

【概略】

・今作の主人公。年齢は物語開始時点で14歳（誕生日で15歳）。

中性的な美少年。瞳は深い紫色。髪は腰に届く位の長髪で、色は純白。対して服は黒いものを好んで着る（基本的に着物が殆ど、洋服は必要に応じて）。この歳で相当な実力を持っており、蒼崎姉妹の喧嘩に割り込んで止められる程（＝世界を救済できるレベル）。魔術師では無く、日本古来の術法の大系？法術？を扱う？法術師？。扱う術が？呪？を基礎としている為、？呪法使い？の別名で呼ばれる。属性は五行説の木火土金水に基く五大元素使い。アベレージ・ワン。自覚してはいないが、彼の根源は『両極』である。

【名前】 蘇芳宮 すおうのみや 綾嶺 あやね

【誕生日・血液型】 7月20日 / A B型

【生別】 女性

【身長・体重】 151cm / 41kg

【イメージカラー】 カーディナルレッド

【属性】 雷、血の二重属性

【特技】 高速思考による先読み、ルーン魔術

【好きなもの・苦手なもの】 血液、甘味 / 辛味

【天敵】 激辛麻婆豆腐

【概略】

・本作のヒロイン。年齢は物語開始時点で12歳（誕生日で13歳）。顔付きはかの和服アンニュイ少女似。瞳は燃えるような紅色。髪は肩に届く位のミドルヘアで、色は漆黒。何を着てもその上から白衣を羽織るのが彼女のポリシー。死徒化の研究をしていた魔術師である両親が、その心血を注いで完成させた最高傑作。『オーバーブラッド神の鮮血』と名付けられた彼女の血は、死徒の持つ不死性を維持しつつ、太陽光や流水に因る遺伝子情報の損壊といった死徒の弱点を克服する代物である。だが、死徒として覚醒した直後は未完成だった為、他者の血を取り込んで機能を補完する必要があった。なお、肉体的な成長は20代で止まる様にプログラミングされている。属性は雷と血

の二重属性。彼女の起源は『暴走』である。

【名前】 藤野ふじの 顕彰あきり

【誕生日・血液型】 5月3日/A型

【生別】 男性

【身長・体重】 168cm/60kg

【イメージカラー】 セルリアンブルー

【属性】 木

【特技】 文章執筆、脚本

【好きなもの・苦手なもの】 特になし/特になし

【天敵】 特になし

【概略】

・物語開始時点の年齢は14歳（誕生日で15歳）。顔立ちと髪型はEXTRAの男性主人公の様に、整ってはいるんだけど特徴が薄い。髪の色は黒に近いモスグリーン。取り敢えず、着るものに特徴という特徴は無い。彼も魔道の家の出身者なのだが、聖杯戦争が始まる一年前に両親が死亡。が、魔術刻印は既に受け継ぎ済みだったのと、四代程続いた家の者としては破格の魔術回路を持っていることもあり、魔術師としては非常に優秀である。ロシア語の呪文を基盤とし、主に暗示を得意とする。その一方で、植物を操る魔術であれば右に出る者はいない。第四次聖杯戦争時は、穂群原学園1年A組に所属しており、藤村 大河とは同級生の関係である。属性は五行説の木。彼の起源は『収財』。

【名前】 萩野谷はぎのや 沙織さおり

【誕生日・血液型】 2月22日/B型

【生別】 女性

【身長・体重】 133cm/34kg

【イメージカラー】ブロンズグレイ

【属性】金

【特技】魔具の鑄造

【好きなもの・苦手なもの】武器／現代機器

【天敵】？ばそこん？なるもの

【概略】

・年齢は物語登場時点で9歳（誕生日で10歳）。顔立ちは三咲町のカンフー少女に似ている。髪は短いシャギーカットで、色は鋼色。瞳も同じく鋼色。水干を好んで着用する。先祖代々曰く付きの武具を鑄造する一族、萩野谷の末裔。先祖からの記憶を、血を媒介にし、記録として受け継ぐという特殊体質の持ち主。様々な事象を知りながら生まれてきた所為か、性格は非常に達観しており、物事を客観的に観測する術を身に付けている。また、口調が何とも古臭い。魔術兵装の鑄造を得意とし、材料と工房さえあれば、宝具クラスのものも鑄造可能。また、金属を自在に操る魔術の使い手でもある。第四次聖杯戦争時は、遠坂 時臣の参謀役として協力する筈だったが……。属性は五行説の金。彼女の起源は『鍛練』。

【名前】桂 かつら 義雄太 ギョウター

【誕生日・血液型】3月5日／O型

【生別】男性

【身長・体重】157cm／50kg

【イメージカラー】ブライトゴールド

【属性】土

【特技】我流拳法

【好きなもの・苦手なもの】師匠、瞑想／術数権謀

【天敵】複雑怪奇な策略

【概略】

・年齢は物語登場時点で9歳（誕生日で10歳）。顔立ちはそれな

りに整っている。髪はショートで金色、瞳は空色。服装に頓着はしない。生まれは中東で、両親は内戦中に野戦病院勤務の医師として知り合った二人。父親がゲルマン系で、母親が日系。幼い頃に反政府系の組織に攫われ、殺人兵器として仕立てあげられる。久宇 舞弥とは境遇も生まれた場所も近い。根は純真な年相応の少年だが、殺人に掛けては超一流で、彼はそれをコンプレックスとしている。アサシンと出会ってからは、そのコンプレックスも解消しつつある。魔術は使えないが、魔術回路は開いている為、修業すれば魔術も使用可能になる。属性は五行説の土。彼の起源は『正義』。

matrix | open (a) ; (後書き)

現在、^{オープン}開示されている情報^{マトリクス}

- ・紫苑 玲慈
- ・蘇芳宮 綾嶺
- ・藤野 顕彰
- ・萩野谷 沙織
- ・桂 義雄太

matrix | open (b) ;

システム | 起動
system | activation

全 | 蔵書 | 異常無し
all records | green

霊子 | 虚構空間 | 正常稼働
serial phantasm | green

情報 | 開示
matrix | open

分類 | サーヴァント | マーセル
sort | servant / moon - cell

プログラム | インストール
program | install

十 十 十

【クラス】 キャスター

【マスター】 紫苑 玲慈

【真名】 玉藻前

【生別】 女性

【身長・体重】 161cm / 50kg

【属性】 混沌・善

【ステータス】

・筋力：C

・耐久：E

・敏捷：B

・魔力：A+++

- ・幸運：A
- ・宝具：EX

【クラス別スキル】

陣地作成：B

魔術師として、自らに有利な陣地を作り上げる。
？工房？の形成が可能。

道具作成：B

魔力を帯びた器具を作成できる。

呪符・霊符といった日本特有の魔術礼装を作り出すことに長けている。

【固有スキル】

怪力：B

魔物、魔獣のみが持つ攻撃特性、一時的に筋力を増幅させる。
使用する事で筋力をワンランク向上させる。
持続時間は？怪力？のランクによる。

言語理解：B

動物たちの言葉を理解することが出来る。

呪術：EX

西洋の魔術とは異なる術法の大系。

自身の肉体を媒体にして発動させるのが特徴。
その為、術が失敗した際の代償は全て発動した術者に降り懸かる。

変化：A

他人に憑依、変身する能力。

『借体成形』の別名を持つ。

他人の身体に入り込み、その姿を完全に模写、身体から抜けた後

に変身することが出来る。

【クラス】セイバー

【マスター】蘇芳宮 綾嶺

【真名】ガウエイン

【生別】男性

【身長・体重】188cm / 78kg

【属性】秩序・善

【ステータス】

・筋力：B+(A++)

・耐久：B+(A++)

・敏捷：B(A)

・魔力：A(A+)

・幸運：A(A+)

・宝具：A+++

(括弧内の値はスキル『聖者の数字』発動時のもの)

【クラス別スキル】

対魔力：B

魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する。

大魔術、儀礼呪法等を以てしても、傷つけるのは難しい。

騎乗：A

幻獣・神獣ランクを除く全ての獣、乗物を自在に操れる。

【固有スキル】

勇猛：B

威圧・混乱・幻惑といった精神干渉を無効化する能力。

また、格闘ダメージを向上させる効果もある。

戦闘続行：B

瀕死の傷でも戦闘を可能とし、決定的な致命傷を受けない限り生き延びる。

精霊の加護：A

精霊からの祝福に因り、危機的な局面に於いてのみ優先的に幸運を呼び寄せる能力。

その発動は武勲を立て得る戦場のみに限定される。

聖者の数字：EX

ガウエイン卿の持つ特殊体質。

午前九時から正午、午後三時から日没までの三時間の間のみ発動。発動中、全パラメータを1ランクアップさせる。

【クラス】ライダー

【マスター】藤野 顕彰

【真名】フランシス・ドレイク

【生別】女性

【身長・体重】170cm / 53kg

【属性】中立・悪

【ステータス】

・筋力：D

・耐久：C

・敏捷：B

・魔力：E

・幸運：EX

・宝具：EX

【クラス別スキル】

対魔力：D

シングルアクション

一工程に因る魔術行使を無効化する。

魔力除けのアミュレット程度に対魔力。

騎乗：

騎乗の才能。

後述するスキル『嵐の航海者』の発動により、通常の騎乗スキルは失われている。

【固有スキル】

嵐の航海者：A+

船と認識されるものなら、どんなものでも乗りこなせる才能。

集団のリーダーとして必要な能力も兼ね備えている特殊スキル。

ランクA相当の軍略、カリスマの効果も併せ持っている。

星の開拓者：EX

人類史に於いてターニングポイントとなった英雄に与えられる特

殊スキル。

あらゆる難航、難行が？不可能な儘？？実現可能な出来事？になる。

連携攻撃：A

複数での攻撃に長けていることを示す能力。

他者との連続、及び同時に攻撃を行う際、双方の攻撃の威力が底上げされる。

黄金律（偽）：B-

略奪行為に因る金銭の蒐集力、及び支配力。

海賊としてのスキルを大きく超越し、国家予算クラスの額を集める事も可能。

ただし、蒐集した金銭は湯水の如く使われる為、極一時的なもの

でしかない。

【クラス】アーチャー

【マスター】萩野谷 沙織

【真名】ロビンフッド

【生別】男性

【身長・体重】173cm / 72kg

【属性】中立・善

【ステータス】

・筋力：C

・耐久：C

・敏捷：B

・魔力：B

・幸運：B

・宝具：B

【クラス別スキル】

対魔力：D

シングルアクション

— 工程による魔術行使を無効化する。

魔力除けのアミュレット程度の対魔力。

単独行動：A

マスターからの魔力供給を断つても自立できる能力。

ランクAならば、マスターを失っても一週間は現界可能。

【固有スキル】

破壊工作：A

戦闘を行う前の準備段階で相手の戦力を削ぎ落とす才能。

ランクAならば、相手の進軍前に六割近い兵力を戦闘不能にすることも可能。

ただし、このスキルのランクが高い程、英雄としての霊格は低下していく。

精霊の加護：B

精霊からの祝福に因り、危機的な局面に於いて優先的に幸運を呼び寄せる能力。

その発動は敵に認知されていない状況のみに限定される。

千里眼：C

視力の良さ。

遠方の標的の捕捉、動体視力の向上。

仕切り直し：C

戦闘から離脱する能力。

また、不利になった戦闘を開始ターンに戻し、技の条件を初期値に戻す。

【クラス】アサシン

【マスター】桂 義雄太

【真名】李書文

【生別】男性

【身長・体重】184cm / 66kg

【属性】中立・中庸

【ステータス】

・筋力：B

・耐久：C

・敏捷：A

・魔力：E

・幸運：E

・宝具：C+

【クラス別スキル】

気配遮断：

サーヴァントとしての気配を絶つ。

完全に気配を絶てば発見することは不可能に近い。

だが、彼の持つ気配遮断はそれらのどれにも該当せず、姿を目視不能にすることすら可能。

更に、自らが攻撃行動に移ってもこの気配遮断の性能は全く落ちない。

【固有スキル】

中国武術：A+++

宇宙と一体になる事を目的とした中華の武術をどれ程極めたかの値。

習得の難易度も最高レベルで、Aでようやく？習得した？と言えるレベル。

A+++ともなれば達人の中の達人。

圏境：A

気を使い、周囲の状況を感じし、また、自らの存在を消失させる技法。

極めた者は天地と合一し、その姿を自然に透けこませる事すら可能となる。

このサーヴァントの『気配遮断』スキルはこの技能に因るもの。

心眼（真）：B

修業・鍛錬に因って培った洞察力。

自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、その場に残された活路を導き出す？戦術理論？。

逆転の可能性が1%でもあるのなら、その作戦を実行に移せるチ

ヤンスを手繰り寄せられる。

宗和の心得：B

同じ相手に同じ技を何度使用しても命中精度が下がらない特殊な技能。

攻撃が見切られなくなる。

matrix | open (b) ; (後書き)

現在、^{オープン}開示されている^{マトリクス}情報

- ・ キャスター
- ・ セイバー
- ・ ライダー
- ・ アーチャー
- ・ アサシン

Matrix | open (c) ;

システム
system | activation
全蔵書
all records | green
異常無し
霊子
serial phantasm | green
正常稼働
情報
matrix | open
開示
分類
sortable
宝具
phantasm / moon - cell
moonセル
プログラム
インストール
program | install

十 十 十

【アーチャーの宝具】

『インビジブル・フォレスト
森 王結 界』

【ランク：C】 【種別：対人宝具】 【レンジ：】 【隠蔽対象：1
人】

彼がその背に羽織っている深緑のマント。

起動すると、光の屈折率を調節し、周囲の風景に透け込むことが出来る。

ただし、彼には気配遮断スキルが無い為、その気配まで消し去ることは出来ない。

長距離での隠密行動、並びに至近距離での攪乱・奇襲に大いに役立つ宝具。

【アサシンの宝具】

『猛虎硬爬山』

【ランク：C+】 【種別：対人宝具】 【レンジ：1】 【最大捕捉：1人】

彼が得意とし、ただ一つ極めた八極拳の奥義。

利き腕に因り把子拳、寸勁、頂肘を瞬時に繰り出す高速三連撃。

魂に沁み込んだその動作は、彼の状態に関わらず完璧な一撃として放たれる。

八極拳の八門守破の理念を宿したこの技は、同ランク以下の守りを破壊する。

matrix | open (c ;) 後書き

現在、オープン 開示されている情報マトリクス

- ・ 『森王結界』
- ・ 『猛虎硬爬山』

第四次聖杯戦争。

謀略と凄惨に満ちた戦い。全ての始まりとなった戦い。

月の杯は、この戦いに七つの石を^意投げ入れる。^{ムンセル}

それらは何を齎し、何を引き起こすのか。

……それを知る者は……

00・ouverture/les d's sont jet's

000 .ouverture d's sont jet's
【零・序曲ノ賽 は投げられた】

今から凡そ200年前に遡る。

日本の『冬木』という名の土地に、三人の魔術師が、その智慧を出し合つて創り上げた、史上類を見ない規模の魔術礼装。

七体の英霊を呼び出し、その魂を喰らつた後、手にした一人の願いだけであれば、どんなものでも必ず叶える、究極の願望器……

『聖杯』と呼ばれるものを奪い合う争いは『聖杯戦争』と呼ばれ、広義ではオークションでさえ分類されるそれらの争いの中で、最も苛烈と言われるのが、『冬木の聖杯戦争』である。

今回で四回目となるこの『冬木の聖杯戦争』に魅入られたのは、二人の男。

一人は、『魔術師殺し』と呼ばれた冷酷無比な？正義の味方？。

もう一人は、生まれついで自身の性質に戸惑う？先天性の悪？。

二人の男の運命は、この第四次聖杯戦争に於いて、擦れ、絡み合い、相克の螺旋を描いていく。

明鏡止水が如く、不動たる運命の水面に、月より投げ込まれしは七つの石。^{意思} その小さな波紋は互いに干渉しあい、やがて大きな波と

なりて、回る運命fateの齒車を撃ち壊すに至るのか……

……その結末や未だ誰も知らず。ただ己はそれを記録するだけのもの也……

彼の者の名は
セブンスヘブン・アートグラフ
七天の聖杯

十 十 十

「んん……うう……」

心地好い朝の陽射しが、障子の隙間から差し込み、頬を涼やかな空気が撫せていく。寝返りを打とうとしたが……

「……んん……んん……？」

……どうにも巧くいかない。誰かが右腕を抱き寄せているようだ。それに、何だか豪えらく柔らかい感触を感じる……

「……何だ……？」

ゆっくりと瞼を開いて、顔を身体の右側に向けてみる。すると其処には……

「……」

「すー……すー……」

……ピンク色の髪に狐耳を生やした美少女が、オレの傍らで心地好さそうな寝息を立てていた……

§ § §

「……で、話は戻るが……」

オレの名は紫苑^{しおん} 玲慈^{れいじ}。今年で15歳になる、寂れた骨董屋の跡取り息子……なのだが、諸事情あつて既に経営者となっている。

「どうしてオレがお前の御主人様なんだ？」

「それは貴方が御主人様だからです！」

目の前にいるのは、如何にも誇らしげな表情の少女。ピンク色の髪に狐耳を生やし、フカフカの尻尾まで生やし、何とも露出度の高い紫の和服のようなものを身に纏った美少女が、目の前に正座しているのだ。耳は付け耳であつて欲しかったが、ピクピクと動く実物であつた。即ち、尻尾も然り、である。

「それは回答になつていない。オレはお前を雇つた覚えは無いんだ。」
「うう……だつて御主人様は……」

経緯^{いきわづらひ}は単純だ。昨晚、オレはいつも通り布団に入つて寝た。翌日、起きたらコイツがオレの右腕を睨^{しつか}と抱き寄せながら、オレの布団の中で寝ていた、という訳だ。……オレ、夜這いされるような関係を作つた覚えはからつきし無いんだが……

「……判った。オレはお前の御主人様でいいことにする。」
「本当ですか!？」

これは、この儘では一切話が進まないパターンだと見たオレは、仕方なしに彼女を自分の従者という事にした。

「ただし、事情は話してもらおうぞ。」

当然である。見ず知らずの少女 しかも、オレが主人だということに何故夜這いされなければいけないのだろう。理由無しでする筈が無い。そこはオレとしてもハッキリさせておきたい。

「それはですねえ……」

彼女曰く、それは昨晚の事……

† † †

ふと気が付くと、私は庭の真ん中に一人突っ立っていた。辺りを見渡すと、小振りながら見事な日本庭園。私が立っているのは、枯山水の真只中。砂礫の川には、自身を中心に綺麗な波紋が描かれている。

「はぁ……」

思わず見蕩れてしまう。生前、帝の離宮の枯山水に足を踏み入れたことがあったか。その時の再現の様な、そんな光景。

「はっ……私は……」

ハツと我に返った。私は那須野で朝廷の討伐軍に敗れ、死んだ筈……では、此処に立っている私は何者か。紛れも無く、私は生きている。肉体もある。では何故、私はこうして此処に立っていられるのか……

「聖杯……戦争……？」

……そこまで考えた時、一つの単語が、フツと頭に浮かんだ。『聖杯戦争』……手にした者の願いを、例えそれがどんなものであれ、必ず叶える究極の願望器……『聖杯』を巡って、七人の魔術師メイカスがそれぞれ七騎の従者サーヴァントを従え、競い争い殺し合う、魔術の大儀式……そんな知識が、まだぼやけ気味の頭の中を駆け巡った。そして……

「？サーヴァント：クラス『キャスター』、マスターと共に、第四次聖杯戦争に介入せよ？……」

……魂に焼き付いた謎の文句。誰が言ったのか定かですら無い。それでいながら、まるで誓約が如く頭の中をぐるぐると回り続ける。釈然としない儘、私は再び周囲を見渡した。

「私はサーヴァント……クラスは『キャスター』……なら、私を呼び出した御主人様マスターが此の近くに……」

ぼやけていた頭も、涼しげな夜風に困って幾分冴えて来た。精神を集中して、自身から伸びる魔力妖気のレイラインを辿る。それは、背後の日本家屋に通じているようだ。

「……………」

物音をなるべく立てないように、ゆっくりと障子を開き、そつと中に入る。自身から伸びるレイラインは、目の前の布団で眠る美少年に繋がっていた。

「わあ……………」

月明りに照らされたその寝顔は、中性的で、肌はきめ細かく柔らかそうで、その髪は白絹の如く純白で滑らか……………完成された一つの美が、其処にはあった。

「……………」

その人に見蕩れていると、ふと肌寒さを感じた。私は、無意識の趣く儘、眼前の布団に潜り込んだ……………

† † †

……………という次第らしい。聖杯戦争については、実は大体の事を知っている。これは、オレがこの歳で継いだ骨董屋の裏の顔が、魔術用品の仲買人である為。昔から鼻屑ノーズにしている一番の常連客が魔術の名家出身の人で、『冬木の聖杯戦争』についても小耳こみみに挟んだことがある。というか、その人からの伝手で、『冬木の聖杯戦争』に詳しいとある人物と知り合いになったといった方が正しいが。

「まあ、状況は大凡理解できた。お前はオレのサーヴァントで、クラスは『キャスター』。昨晚、突如として家の庭うちに召喚され、マスターであるオレの布団に潜り込んだ、と……………」

「はい。そう言う訳です。」

……しかし、困ったことにはなった。話を聞く限りでは、彼女……キヤスターの基本行動原理に、？第四次聖杯戦争への介入？という文言が刷り込まれているらしいのだ。召喚されたのは昨晚の事であるのは確実だから、恐らく召喚されてから刷り込まれたという事は先ずあり得ない。第一、英霊に対して刷り込みや暗示が出来る魔術師がこの世に生きているとは先ず考えられない。刷り込みは召喚以前、彼女の魂が英霊の座から呼び寄せられた時に起きたと推測できる。つまり、彼女は？聖杯が明確な意思を持って召喚した？という事になる。

彼女を召喚したのが冬木の聖杯なら、これは由々しき事態であろう。話で聞いたことしかないが、聖杯とは無色の魔力を一時的に貯め込む為のものであり、何らかの意思を持つこと自体が異常なのである。つまりは、彼女は冬木の聖杯に召喚された存在では無い、という事が断言できる。それに……

「え……ちよ、御主人様？」

「ふむ……魔力の供給を断つても実体化し続ける身体……受肉している、ということか……？」

首を傾げながら、キヤスターの肩や頭を撫で回す。彼女が昨晚の話をしている間に、意識的に魔力の供給を断つてみたのだが、彼女は一向に霊体化しない。話に聞くサーヴァントの特徴と一致しない箇所の一つだ。

「むう……蒼崎の姉あねさんにでも、一つ話を聞いてみるか……」

「あ……」

「ん？ どうした？」

ふと視界をキャスターの方に戻す。意識の束縛から逃れた右手は、始終彼女の頭を撫で回していた。

「何て言うか……頭などでされるのは嬉しいんですけど……その……心が籠ってない、というか……」
「……ああ、悪かった。少し考え事をしていた。……済まなかったな、よろしよし。」
「きゃあ、嬉しいです、御主人様！」

オレが笑顔で頭を撫で回すと、それに応えるように満面の笑みに包まれるキャスター。うん、この笑顔はかけがえの無いものだ、と心の隅で思ったオレであった。

十 十 十

深夜。辺りは静まりかえっている。草木も眠る丑三つ時とはよく言ったものだ。

「……………」
夜空には満月が浮かんでいる。ワタシが最も不安定になる日、そして……

「……………」
両手に視線を落とす。案の定、その手は黒いような赤いような液体で染められていた。

「ああ……またやってしまった……」

思わずそつ口を滑らせる。先程も言った通り、満月の夜、ワタシの精神は最も不安定になる。そして……？ワタシ？が？ワタシ？を？保てなくなる日？でもある。

「もつ……どうして……」

視線を足元に降ろす。其処には、首筋が血塗れになった少女が横たわっていた。ピクリとも動かない。

「……………」

ワタシ自身、何故こんな事をしてしまうのか、余りよく判っていない。ただ、満月の夜になると、ワタシの中の何かが抑えきれなくなる、という事だけは判っている。それが抑えきれなくなると、自分が何をしているのか判らなくなつて、気付いた時には、もう事後という事がよくある。

ワタシがこんな風になつたのは五年前、ワタシが九歳になつた誕生日の夜からだ。誕生日パーティーの後、ベッドに入つて寝たのだが、ふと気が付いたら、自宅とは別の場所において、今と殆ど同じ状態になつていたのである。ワタシは恐ろしくなつて、必死に家を目指して、裸足で直走つたのを、今でも鮮明に覚えている。

ただ、事が終わった後は、満ち足りた感じ……達成感とか、それに近い感情を伴つた恍惚感が、ワタシの中を支配するのだ。昔は一人襲えば十分事足りていたが、最近はどうも、一人では足りないらしい。

「……………」

乾涸^{ひから}びた少女を尻目に、幽鬼が如く揺ら揺らと歩みを進めるワタシの身体。足りない、まだ足りない、と脳の奥底が叫んでいる。ワタシの意思に関係無く、本能のレベルで脳は身体に指示を出す。？まだ吸い足りない？と。

「綾ねえ！」

「……………」

最初の場所からしばらく行った辺りで、背後から声を掛けられた。振り向く間もなく、その声の主が自分の前に躍り出る。確か近くに住む、小学校の時の後輩の……

「！…………綾ねえ…………どうしたの、その手と顔は！？」

…………誰だかは今、思い出す余裕が無い。ただ、ワタシの本能は、月明かりに照らされる彼女の、白くて綺麗な首筋を噛み切って、思いの儘にその血を飲み干せ、と魂が命じてくる。

「綾ねえ…………もう、綾ねえったら！！！」

心配して来てくれたのだろう。だが、今のワタシに近付くことは、自殺行為以外の何ものでも無い。もう…………モウ…………

「モウ…………抑エ切レナイ…………！！！」

「えっ…………！！！」

眼前の少女に抱き着き、一思いに右の頸動脈を噛み切る。喉元に咬み付かれて、彼女は声にならない声で苦悶する。ワタシの口には、

生暖かい液体が勢いよく流れ込んでくる。

「っ…………ん…………!!」

彼女の身体から、力が徐々に抜けていく…………嫌だ…………彼女の首筋は紅に染まり、その顔は蒼白になっている…………何故、ワタシは…………意識の隅に追いやられた理性が復帰した頃には、ワタシの頭を恍惚が支配していた。

「はあ…………はあ…………」

口を首筋から離す。すると、彼女の首筋からはまだ血が溢れ出て来る。

「……………………!!」

ハッと我に返ったワタシは、自身の服の一部を帯状に破いて、血の溢れ出る首筋を塞ぐように結んだ。満月の時のワタシに狙われて、未だ生きている初めての人間だった。

「ワタシは…………とんでもないことを…………」

恍惚と絶望が交互に去来する。そんな中、彼女はワタシの手を強く握りしめて来た。

「いいよ…………綾ねえが必要なら…………僕は命をあげたっていいよ…………」
「……………………」

その言葉に呆然としたワタシは、数刻の間、身動きが取れなかった。

【玲慈と綾嶺のles coulisses】舞台裏

玲「どうも、白黒の骨董屋こと、紫苑 玲慈です。」

綾「そして、その助手、蘇芳宮 綾嶺です。」

玲「遂に始まったな。」

綾「ああ、始まったな。因みにだが、タイトルの『Rhapsodie Lunaire』とは、どういう意味なんだ？」

玲「お前、(まだ描写されてないけど)呪文にフランス語使ってるだろ。どうして聞くんだ？」

綾「厭、これも読者の為の一応、という奴だ。」

玲「お前が説明すればいいだろうに……『Rhapsodie Lunaire』とは、直訳すると『月の狂詩曲』だ。ムーンセルに因って召喚されたサーヴァントとそのマスターが奏でる、運命の調和を乱す狂詩曲という意味合いだな。」

綾「よし、それ位でいいだろう。早速なんだが、今回の話で召喚されたサーヴァントの情報を公開しておこう。」

【クラス】 キャスター

【マスター】 紫苑 玲慈

【真名】 玉藻前

【生別】女性

【身長・体重】 161cm / 50kg

【属性】混沌・善

【ステータス】

・筋力：C

・耐久：E

・敏捷：B

・魔力：A+++

・幸運：A

・宝具：EX

【クラス別スキル】

陣地作成：B

魔術師として、自らに有利な陣地を作り上げる。

?工房?の形成が可能。

道具作成：B

魔力を帯びた器具を作成できる。

呪符・霊符といった日本特有の魔術礼装を作り出すことに長けている。

【固有スキル】

怪力：B

一時的に筋力を増幅させる。魔物、魔獣のみが持つ攻撃特性。

使用する事で筋力をワンランク向上させる。

持続時間は?怪力?のランクによる。

言語理解：B

動物たちの言葉を理解することが出来る。

呪術：EX

西洋の魔術とは異なる術法の大系。

自身の肉体を媒体にして発動させるのが特徴。

その為、術が失敗した際の代償は全て発動した術者に降り懸かる。

変化：A

他人に憑依、変身する能力。

『借体成形』の別名を持つ。

他人の身体に入り込み、その姿を完全に模写、身体から抜けた後に変身することが出来る。

綾「……まあ、こんな所でしよう。キャスターで『怪力』持ちとか、どこのオールラウンダーだ、このキャス狐は。」

玲「ま、一応元は『妖獣』ですし。バリバリに呪われた後ポコポコにされる敵には同情の余地しかありません。……・ところで宝具はどうするのさ。ランク公開しちゃってるけど……」

綾「それは別の時にでも。それまで書いたら時間がかかる。」

玲「まあいいや。でも、マスターの情報マトリクスも出しておきたい。といっても、オレの事なんだけどね。」

【名前】紫苑しおん 玲慈れいじ

【誕生日・血液型】4日8月/O型

【生別】男性

【身長・体重】170cm/61kg

【イメージカラー】モノクロ

【属性】木、火、土、金、水の五大属性アペレージ・ワン

【特技】占い、機械整備、料理

【好きなもの・苦手なもの】美、賢、醜、愚、極端/凡庸、中途半端

【天敵】 紹興酒

【概略】

・今作の主人公。年齢は物語開始時点で14歳（誕生日で15歳）。中性的な美少年。瞳は深い紫色。髪は腰に届く位の長髪で、色は純白。対して服は黒いものを好んで着る（基本的に着物が殆ど、洋服は必要に応じて）。この歳で相当な実力を持っており、蒼崎姉妹の喧嘩に割り込んで止められる程（≡世界を救済できるレベル）。魔術師では無く、日本古来の術法の大系？法術？を扱う？法術士？。扱う術が？呪？を基礎としている為、？呪法使い？の別名で呼ばれる。属性は五行説の木火土金水に基く五大属性。^{アベレジ・ワン} 自覚してはいないが、彼の根源は『両極』である。

玲「……ま、こんなもんだろ。」

綾「ワタシの時も同じ位長くにさせて貰うぞ。」

玲「構わないよ。どの道長くなりそうだから。」

綾「さて、少し長くなってしまったけど、そろそろ終わりの時間だ。」

玲「予め言っておくべきだったけど、このコーナーは設定の公開と次回予告の為のコーナーとなる。まあ、あれだ。Carnival Phantasmのタイガー道場のようなコーナーだ。……あれは真面に機能してはいないけれども……」

綾「では、次回予告と洒落込むか。」

次回予告

少女の見る夢。

アインツベルン

衛宮 切嗣

雪上に落とされた墨の一滴の決意。

月のセイバー

太陽の騎士が現界し、異端の物語は、ゆっくりと動き始める。

次回、Fate/Rhapsodie Lunaire

『1.ouverture/le r?ve de Carmil
la』

……彼女は死徒、そして魔術師……

01・Overture / Le r?ve de Carmilla

01・Overture / Le r?ve de Carmilla
【壹・序曲 / 少女の夢】

「おはよう、綾ねえ！」

「おはよう、悠子。」

ワタシの名前は蘇芳宮 綾嶺。今年で13歳になる中学生だ。実は一人暮らしなのだが、若くして亡くなった両親が遺して逝った莫大な遺産（半端じゃない額の預金、今住んでいる屋敷など、到底一人では使いきれない位）と、ワタシの 元は両親の 謎の口座（お金の単位が£^{ポンド}なので恐らくイギリスにある口座、口座の資料は一般人には読めないであろう不思議な文字で書かれているが、何故かワタシは読めているし、ちゃんと利用できている）の御蔭で、取り敢えず何不自由ない生活を送れている。

ワタシの横に並んで歩いている少女は、^{えんじやう} 臙条 ^{すずか} 鈴鹿。この町、禅城の隣にある冬木市に住んでいる、ワタシより三つ下の後輩だ。冬木市には住んでいるが、市の淵に家があり、冬木より禅城の方が近い為、この町の小学校に通っているという訳だ。因みに、家族は両親の他に、今年で6歳になる弟がいる。赤銅色の髪が特徴的な、可愛らしい少年だ。名前は確か……『シロウ』とか言ったかな……

「鈴鹿、噂に聞いたのだが、今度引っ越すそうじゃないか。」

「うん、冬木市の新興住宅街に一軒家を買ったの。其処なら冬木の小学校にも通えるんだ。」

ワタシは心の隅に、一抹の寂寥感を感じる。実際、彼女以外に深

く付き合いのある友達はいないし、彼女ほど深い付き合いを持つ友達もない。何だか、置き去りにされるような気分だ。

「ねえ、そう言えば今日の夜で二ヶ月だよな。」

そんなワタシの心境を察したか、彼女がそれと無く話題を逸らした。

「……ああ、確かにそうだ。今夜は満月だな。」

「一ヶ月前、運悪く泊まりに行けなかつたけど、どうだった？」

あの満月の夜……ワタシが彼女の血を吸ってから今日で二ヶ月。あの後、ワタシは彼女に全てを話した。

満月の夜は自分の中の何かを抑え切れなくなる事、抑え切れなくなると誰かを襲って血を吸っている事、こんな現象は6歳の誕生日の夜からである事など……兎に角、全てを話した。

全てを話すと、彼女はその双瞳を燦然と輝かせながら……

『凄い！ まるで吸血鬼ドラキュラじゃない！！』

……と宣った。普通、此処は怖がるところじゃないのか？ 徒ただでさえ彼女は自身の血を吸われているというのに、そんな羨望の視線を向けるものではない、と説得すると……

『あ、でも吸血鬼ドラキュラって陽の光を浴びると灰になっちゃうんだよな？ 綾ねえは大丈夫なの？ あ、昼間学校に来てるんだから大丈夫だよねー！』

……全く聞いていない。彼女は、ワタシが二人目に襲って、尚且つ血が多かった御蔭でよかったものの、襲われたのが一人目だったから死んでいたかもしれない……否、間違いなく死んでいた。

もしかしたら自分を殺していたかもしれない女を前にして、どうして羨むことができるのか……自分にはいまい理解が出来なかったのである。……もしかしたら、彼女はオカルトが堪らなく好きなのかもしれない……

彼女の喜悦と興奮は留まるところを知らず、やれ翼を出せだの、魔法を使ってみろだのと無茶な注文を付けて来る。……さつき血を吸われたばかりなのに、どうしてここの血の気が多いのだろう……どうせなら失神するまで血を吸っておくんだだと、変な後悔の念を覚えながら、その満月の夜は過ぎて行った。

「ああ、そう言えば一ヶ月前は何とも無かったな。ただ、全身に力が漲る感覚はあったけど。」

「うふふ、やっぱり僕の言う通りになったでしょ？」

それから彼女は、週に二、三回のペースでワタシの屋敷に泊まりに来ている。彼女曰く、『抑えられなくなるのは、普段から吸っていないからじゃない？』とのこと。つまり、定期的に血を吸っていれば、あの衝動にも襲われなくなるかもしれないという事だ。勿論、反対はしたが、結局彼女に押し切られてしまい、今も定期的に血を吸わせてもらっている。

流石に吸いつ放しでは彼女の身体に毒なので、潤沢な資金を元に造血剤を買ってあげている。少しでも恩返しになればとの考慮だ。

「それより、買ってやってる造血剤はちゃんと飲んでいるか？」

「ま、まあ、それはちゃんと……」

「錠剤なんだから味は無い筈だ。嫌がらずに飲め。先輩命令だ。」

「ええ……」

「血を吸い尽くされて死にたくなかったら飲むことだ。ワタシはお前の心配をしているのだぞ？」

「はあい。」

他愛も無い話をしている内に、自分たちが通う『禅城町立小学校・中学校』と縦に掛かれた銅製の看板が掲げられている校門前の前に辿り着いていた。因みに、此処せんじょうの小学校と中学校は、その校庭を共有している。

「あ、僕朝練あつたんだ！」

「判っている。さつさと行け。」

「うん、じゃあ放課後ね。」

「ホームルームには遅れるなよ！」

校庭を駆けていく鈴鹿。彼女はこの小学校の弓道クラブに所属している。その腕前たるや、スポーツ進学校から勧誘が殺到する位である。この儘、禅城の中学校に上がれば、廃れかけている禅城中弓道部が再び活気づくというものを……まあそんなことは、ワタシにとっては別にどうでもいいことである。

「さて、行くか。」

ワタシは校舎に向けて歩き出した。風に戦ぐ木葉の音と小鳥の囀りが耳を濯ぎ、柔らかい微風と陽の光が肌を撫でていく……有り触れた朝の光景が、其処にはあった。

「切嗣様！」

ワタシは夢を視ている。

「切嗣様！」

礼拝堂の扉が開け放たれる音。同時に響く女性の声。一人のメイド服の様な衣装を纏った女性が、礼拝堂の奥に腰掛ける男に吉報を捧げるべく現れた。

「……………」

静かに視線を上げる男。その双瞳は何やら濁っている。

「お生まれになりました！」

「……………」

吉報を聞いて尚、男はその表情を変えない。代わりに、右手を左手でぐっと握る。

場面が切り替わった。白くて広い石造りの部屋に、蘇芳色の天蓋が付いた立派なベッドが一つ、ポツンと置いてある。ベッドには、自らの子であるう赤ん坊を抱く美しい女性が座っている。

「可愛い……………とつても……………小さくて、繊細で……………ほら切嗣、目元なんて貴方そっくり……………」

その姿は、まるで聖母マリアの肖像画のようだ。対して窓際に立つ男は、その背中に深い影を落としている。まるで光と闇、何とい

う対比だろう。

「私、この子を産めて本当によかった……」

「アイリ……僕は、君を死なせる羽目になる。」

男の言う事に、自らの子を抱く女性は若干驚いた表情を見せる。だが、直ぐに元の慈しみある表情に戻った。

「判っています。それがアインツベルンの悲願、その為の私……貴方の理想を知り、同じ祈りを胸に抱いたから……だから今の私があるんです。」

彼女は続ける。

「貴方は私を導いてくれた。人形でない生き方を与えてくれた。……貴方は私を悼まなくていい。もう私は貴方の一部なんだから。だから……」

「僕に……」

男が彼女の言葉を遮る。

「僕に……その子を抱く資格は………無い。」

男は静かに、何かの様子が刻まれた右手を握り締めながら、そう言った。

「切嗣、忘れないで。誰もそんな風に泣かなくていい世界、それが貴方の……衛宮 切嗣の夢見た理想でしょ？」

彼女は語調を強め、諭すように男に語り掛ける。

「後八年、それで貴方の戦いは終わる。……貴方と私は理想を遂げるの。きつと聖杯が、貴方を救うわ。」

希望を込めて話す彼女。その胸で、彼女の子供はすやすやと眠っている。

「だから、この子を……イリヤスフィールを抱いてあげて。胸を張って、一人の……普通の父親として……」

「……」

豪雪が吹き荒ぶ中、純白の城に一滴の墨が落とされた。彼は何を求め、その先に何を視るのか……白に支配された世界は未だ、その答えを知らない……

「……」

「……」

ゆっくりと瞳を開く。其処には見慣れた天井がある。

「何だったんだ……あれは……」

どうやら私は夢を視ていたようだ。……吹雪が吹き付ける白い城の中……背中に影を抱く『衛宮 切嗣』という名の男と、『イリヤスフィール』という名の赤子を抱く『アイリ』と呼ばれる女性……どれ一つとして、ワタシの記憶に無いものだ。

「……………」

辺りを見渡す。ワタシの寢室だ。外はまだ満月が天高く昇っている。

「そつだ……半年前の鈴鹿の誕生日の時を懐かしんでいたら……眠くなって……その儘、寝てしまっていたんだ……」

変な夢の所為で、眠気はすっかり吹き飛んでしまった。ベッドから起き上がり、上履きを履く。

「……あれから半年か……」

そつと上履きを履いて自室を出る。カツカツという固い音を立てつつ、書斎の方へ歩みを進める。因みに今の服装は、赤いロングスカートを穿き、黒のセーターの上から白衣を羽織っている状態だ。

「さて……ここからは魔術師^{ワタシ}の時間だ……」

ワタシの書斎は、両親が遺してくれた遺産の一つだ。正方形の四方を分厚い本棚が囲み、本棚の中心を窓とドアが割り貫いているという異質な部屋。本棚には百科事典や異国言語の辞書など、此処だけで小さな図書館として機能しそうな蔵書量だ。しかし、これはこの部屋の表の姿に過ぎない。

「……ここを、こつして……」

正方形のほぼ中心に位置するデスクの引き出しに隠されたレバーを引く。すると、低く鈍い音と共に、部屋の床が表の本棚を残して下に降りていく。

この書齋は二階にある。そして、この書齋の真下である一階部分には何も無い。四方は壁に囲まれ、出入口も窓も無い閉鎖された空間……そこに書齋の床が降り立ち、四方の壁には裏の本棚が現れた。

黒い壁に現れた本棚の中には、普通の人間には凡そ読めないであろう文字で書かれた書籍で埋め尽くされている。魔術関連の文章によく利用されるルーン文字が読めない普通の人間は兎も角、読める者には、此処の蔵書が全て魔術関連のものだと気付くだろう。ワタシの両親は、腕利きの魔術師だったのだ。

「……………」

更に、背後の本棚の中の、一部本が抜けている箇所腕を潜り込ませ、奥のスイッチを押す。

「……………」

すると、正方形のほぼ中心にあったデスクが、ワタシとは反対の方向にスライドしている。元々デスクのあった場所には、更なる地下へ潜っていく為の階段が姿を現した。

「……………」

まるで冥府へと下るオルフェウスが如く、または黄泉平坂を降る幽鬼が如く、ゆっくりと階段を降っていく。その先は、最早常人が足を踏み入れる領域では無い。

「……………」

細長い通路の先。円形の広い空間。壁に沿って並べられたテーブルの上には、ピーカーやフラスコなど、科学実験の用品の中に謎の液体が入って置いてあったり、凡そ普通の人間では理解できないであろう謎の物質が複数、並べられている。それが知識ある者には、魔術の研究道具であることが判る筈だ。

「検索 Recherche, 分類 Classement : ? 論文 tude, Title : 『死徒化の研究』。」

そう呟くと、部屋のあちらこちらが光を発した。発された光が空を舞って一か所に集まり……一冊の論文に纏まった。親の遺してくれた研究書に、蒐集の魔術を掛けておいたのである。

鈴鹿に『魔法を見せる』とせがまれた時、落ち着かせるために真っ先に思いついたのが、この魔術を見せる事だった。ワタシは研究に熱中してしまうと、色んな物……特に書物の類を散らかしてしまう癖がある。なので、この工房にある書物の類には、全て蒐集の魔術を掛けており、ワタシが呪文を唱えれば、たちまち元の位置に元通りなのである。

確かに納得させるには十分だろうが、魔術という神秘は、秘匿しなければいけないものなのだ。両親が遺したこの工房があんなに面倒臭い仕掛けに守られているのも、それが理由だ。魔術は世界の裏側の代物であり、ワタシ達魔術師は、昼では無く夜に生きる人種なのだ。普通の人間には軽々しく首を突っ込んでもらいたくない。突っ込もうとしている人間がワタシの表世界の親友なら尚更だ。……月夜に生きるのは、ワタシだけで十分である……

「さて、我が両親の研究報告に因れば、もうあの衝動は収まっていく頃だ。事実として、先月の満月の夜も、今夜も暴走は起きていな

い、つと……」

近くのテーブルに置いていた研究日誌にそう書き込んだ。ワタシとて好き好んで人殺しをしている訳じゃない。そして、それを善しとしないのがこのワタシだ。ワタシは自身の衝動を抑える為の解決策を、両親が研究していた魔術に求めた。運がいいのか仕組みれたことだったのか、基礎的なもの、応用的なものに関わらず直ぐに上達した。そして、両親が最期に遺したこの研究論文を読み解いている訳である。

それによると、ワタシの身体を流れる血は、両親が心血を注いで作り上げた傑作であり、『死徒が持つ全ての弱点を無効化する』というとんでもない力を持ったものだった。

死徒とは、世界に数多く存在する吸血種の中で、最も『吸血鬼』というイメージに近いものだ。鈴鹿がそう言った通り、ワタシは吸血鬼なのである。しかも、死徒にとって弱点となる陽の光、流れ水などの数多くの弱点を、ワタシはこの血を以て克服しているのである。

ただ、ワタシの血が完全に完成する前に、両親は逝ってしまった。その為、完成の時期が多少なりともずれ込んでいると、ワタシは推測している。

この研究論文に因れば、ワタシの血を完成させるためには、それなりの魔力が籠った新鮮な血液を、定期的、且つ大量に身体に収める必要がある。奇しくも我が親友、臙条 鈴鹿は、半端なく血の気が多く、尚且つそれなりの魔力が籠っているのだ。彼女が冬木に引越す前、寝ている内に少し調べてみたところ、数は少ないが綺麗で整った魔術回路を持っていることが判明した。実家に魔術師の血

が入っている様子は無いし、全く未恐ろしい子だ。

そんな彼女の協力の御蔭で、ワタシの身体を流れる最強の血、『オーバーブラッド神の鮮血』はもうじき完成する。恐らくはもう血を吸う必要は無いだろう。後は、血に含まれる魔力を自身の属性に合わせるだけだ。

「まあ、慌てるのは禁物だ。事が事なだけに、なるべく慎重にならないと……」

そう言いつつ、次に鈴鹿に会えるのは何時だろう、などと考えながら書類を纏めていると……

「何だ……結界に何か引つかかったか？」

ワタシの屋敷は、禅城町と冬木市の丁度境目にある。このところ、冬木市には物騒な空気が流れている為、感知の結界を強化しておいたのが救いとなった。今までの結界では、工房まで違和感が伝わらない。

「拙ますいな……夜中だから遮音の結界は張ってない……余り派手には戦えんから、追いつ返す程度にしておくか……」

早足で階段を駆け上がる。さつきとは逆の手順で、工房の入り口を閉め、床を二階に戻し、手早く書斎から出た。廊下を駆け抜け、素早く正面出入口から広大な庭に出る。

「一体何者が」

違和感の強い方へ視線を向けると、其処には……

「……………」
「う…………美しい……………」

…………そう思わず口にしてしまいそうな程、美しい者が其処には居た。

浮彫で白百合が彫り込まれた純白の鎧は、月光を受けて殊更に白く輝きを放っている。右手に携えた剣からはとても強い魔力を感じる。だが、それは邪悪なものでは無く、神聖なものなのだろう。あの刃の輝きは、人の手では創り得ぬ代物だ。そして何より……

「あ……………」
「……………」

…………視線が重なってしまった。その端正で爽やかそうな顔は、何だか春先の柔い陽の光を思い出させる。ここまでも輝きを放つ彼に比べて、ワタシは……

「……………」
「……………」

そつと近づいてくる彼。寄れば寄るほどに、その輝きは一層煌いて見える。

「…………新たな王、我が主よ……………^{マスター}剣の名に於いて、騎士ガウエイン、^{セイバー}只今此処に参上致しました。剣たる私を、どうか貴女の御傍に置かせてください。」

…………月明りに照らされた太陽の騎士は、^{ガウエイン}ワタシにそう告げながら、臣下の礼を執った…………

01・ouverture/r?vede Carmilla(後書き)

【玲慈と綾嶺のles 舞台裏 coulissses】

玲「どうも、白黒の陰陽師こと、紫苑 玲慈です。」

綾「甘党の死徒こと、蘇芳宮 綾嶺です。」

玲「今回は綾嶺の回だったな。」

綾「何故かワタシは、Fate/Zeroのアニメ冒頭部分を夢に見ていた。そして、ワタシのところにも召喚されたのがガウエイン卿……何かの伏線だろうか。」

玲「じゃ、早速ガウエイン卿マトリクスの情報をどうぞ。」

【クラス】セイバー

【マスター】蘇芳宮 綾嶺

【真名】ガウエイン

【生別】男性

【身長・体重】188cm/78kg

【属性】秩序・善

【ステータス】

・筋力：B+(A++)

・耐久：B+(A++)

・敏捷：B(A)

・魔力：A(A+)

・幸運：A(A+)

・宝具：A+++

（括弧内の値はスキル『聖者の数字』発動時のもの）

【クラス別スキル】

対魔力：B

魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する。

大魔術、儀礼呪法等を以てしても、傷つけるのは難しい。

騎乗：A

幻獣・神獣ランクを除く全ての獣、乗物を自在に操れる。

【固有スキル】

勇猛：B

威圧・混乱・幻惑といった精神干渉を無効化する能力。

また、格闘ダメージを向上させる効果もある。

戦闘続行：B

瀕死の傷でも戦闘を可能とし、決定的な致命傷を受けない限り生き延びる。

精霊の加護：A

精霊からの祝福に因り、危機的な局面に於いてのみ優先的に幸運を呼び寄せる能力。

その発動は武勲を立て得る戦場のみに限定される。

聖者の数字：EX

ガウエイン卿の持つ特殊体質。

午前九時から正午、午後三時から日没までの三時間の間のみ発動。発動中、全パラメータを1ランクアップさせる。

玲「……聖者の数字、強力過ぎだろ……」

綾「上記にもある通り、パラメータ欄の括弧の中のランク表記は、聖者の数字発動中の値だ。」

玲「発動中ならあのヘラクレスですら圧倒できそうだ。時間制限はあるけど、この時間の間なら無双できるんじゃないか？」

綾「これで仕切り直しがあつたら、それこそ無敵なのに……」

玲「欲張りはいけません。序でにマスターの情報もどうぞ。」

【名前】 蘇芳宮 すほうのみや 綾嶺 あやね

【誕生日・血液型】 7月20日 / A B型

【生別】 女性

【身長・体重】 151cm / 41kg

【イメージカラー】 カーディナルレッド

【属性】 雷、血の二重属性

【特技】 高速思考による先読み、ルーン魔術

【好きなもの・苦手なもの】 血液、甘味 / 辛味

【天敵】 激辛麻婆豆腐

【概略】

・本作のヒロイン。年齢は物語開始時点で12歳（誕生日で13歳）。顔付きはかの和服アンニユイ少女似。瞳は燃えるような紅色。髪は肩に届く位のミドルヘアで、色は漆黑。何を着てもその上から白衣を羽織るのが彼女のポリシー。死徒化の研究をしていた魔術師である両親が、その心血を注いで完成させた最高傑作。『オーバーブラッド神の鮮血』と名付けられた彼女の血は、死徒の持つ不死性を維持しつつ、太陽光や流水に因る遺伝子情報の損壊といった死徒の弱点を克服する代物である。だが、死徒として覚醒した直後は未完成だった為、他者

の血を取り込んで機能を補完する必要があった。なお、成長は20代で止まる様にプログラミングされている。属性は雷と血の二重属性。彼女の起源は『暴走』である。

玲「……ガウエインは元より、お前も最強^{チート}じみてるな。」

綾「世界を救える玲慈君程じゃありません。じゃ、きりのいい所で次回予告をどうぞ。」

次回予告

『マキリ』。

『間桐』と名を変え、極東の地に住み着いた魔道の名家。

^{Fate}運命の歯車は軋む音を立てながら、徐々にその回転数を上げていく

……

次回、Fate/Rhapsodie Lunaire

『2・ouverture/le sacrifice est

? l'enfer』

……『生贄』の起源を持つ者、彼女は今捧げられたし……

02 . O u v e r t u r e s a c r i f i c e e s t ? l ' e n t r e e
【式・序曲／生贄は 地の底に】

「……………」

深い夜更けが迫る中、妖しい気配のする屋敷の戸を、一人の男が叩き開いた。

「落伍者がよくおめおめと顔を出せたものよ。……その面、もう二度と儂の前に曝すでないと、確かに申し付けた筈だがな……雁夜……」

雁夜と呼ばれた男が、和装の老獺と相對している。雁夜の顔には、薄らと怒りの表情が見て取れる。

「遠坂の次女を迎え入れたそうだな。」

「ふほほっ、耳の早い……………」

「そんなにまでして、間桐の血筋に魔術師の因子を残したいのか？」

「それを詰るか、他でもない貴様が……一体誰の所為で間桐が此処まで零落したと思っておる。雁夜……お主が素直に家督を受け継ぎ、間桐の秘伝を継承しておれば、此処まで事情は切迫せなんだ。それを貴様という奴は……………」

「茶番は止めるよ、吸血鬼。」

雁夜が老獺の言葉を遮る。その語調には、明確な怒りの意思が込められていた。

「アンタはアンタ自身の不老不死を叶えるために、聖杯を欲しているだけだろうが……」

「ふっふっふっふっふっ……」

聖杯。200年の過去より冬木に伝わる、万能の願望器。その言葉聞いた老獺は、不敵な笑いを零した。

「60年の周期が来年には巡り来る。だが四度目の聖杯戦争には、間桐から出せる？ 駒？ が無い。貴様はまだしも、兄の鶴夜^{ひゃくや}程度の魔力では、サーヴァントを御しきれん。」

雁夜には兄が居る。だが、魔術回路は皆無に等しく、とても間桐の裏^{ひでん}の顔を継げるものでは無かったのである。老獺は続ける。

「では此度の戦いは見送るにしても、次の60年後には、勝算がある……遠坂の娘の胎盤からは、さぞ優秀な術者が生まれ落ちるであろう。あれは中々、？ 器として？ 望みが持てる。」

この老獺は、養子……それもまだ幼い少女ですら、単なる魔術師^ど生産装置^くとしてしか見ていない。断言しよう。この男の頭脳と精神はイカれている。……厭、もしかしたら魂ですらもイカれているかもしれない。？ 妖怪？ とはこの男の為にあるような言葉だろう。

「そう言う事なら……聖杯さえ手に入るなら、？ 遠坂 桜？ に用は無い訳だ。」

雁夜の言葉に、一瞬の沈黙が訪れる。聞こえるのは時計の針の音だけ。

「……お主、何を考えておる……？」

「取引だ、臓硯……オレは次の聖杯戦争で間桐に聖杯を持ち帰る。」

臓硯と呼ばれた老獺は、その醜悪な視線を雁夜に向けている。

「それと引き換えに、遠坂 桜を解放しろ。」

「ふっふっふっふっ、馬鹿を云え。」

老獺は再び、自分の席に戻ろうと歩みを始める。

「今日の今日まで何の修業もしてこなかった落伍者が、僅か一年でサーヴァントのマスターになろうだと……？」

「それを可能にする秘術が、アンタにはあるだろ。アンタ御得意の蟲使いの業が。」

「……ん？……」

臓硯が、疑問を込めた視線を雁夜に送る。

「オレに？ 刻印蟲？ を植え付ける。」

その視線を、真剣な表情で雁夜は返した。

「……雁夜……死ぬ気か？……」

「間桐の執念は間桐の手で果たせばいい。無関係な人間を巻き込んで堪るか……」

雁夜の声に含まれる怒りの度合いが、徐々に増しているように感じる。

「……まさか……心配だとは言っまいな？……？ お父さん？」

「はっはっはっはっ……巻き込まずに済みますのが目的ならば、雁夜……」
「っ……！」

一瞬身をたじろがせる雁夜。この老獺が次に何を言うか、予測できたからである。

「……些か、遅すぎたようじゃのう……」
「ジジイ……まさか！」

十 十 十

そろりそろりと後を付ける僕は、臙条 鈴鹿。ここ冬木市に住む女子中学生です。僕が何故こんな妖怪のいそうな館にいるのかという理由は……

「（桜ちゃん……桜ちゃんが此処に……）」

……先程まで妖怪おじいさんといった雁夜おじさんとの話を、公園で偶然聞いてしまったからです。凜ちゃんと桜ちゃんに初めて会ったのは、中学校の課外レクリエーションでのことであるが、今は時間も無いので省略することにします。雁夜おじさんとは、凜ちゃんと桜ちゃんを伝って知り合ったのです。そのレクリエーション以来、時たま公園なんかで遊んでいたのですが、そんな中でおじさんの話を聞いてしまい、付いて来てしまった訳なのです。

こっそり入った瞬間に気付かれるかと思ったのですが、中にはあの奇妙な妖怪お爺さん一人しか居なくて、そのお爺さんも雁夜おじ

さんとの話に夢中で、僕の存在に気付いていません。これが神の御導きなのか……と内心白いロープの神様にそれと無く祈りつつ、僕は彼らの後を追いかけた。

「（下に降りていく……？）」

まるで魔界にでも向かうかのような、暗く深い竪穴と螺旋階段。それは下に行くにつれて、周囲の壁や階段の組成は徐々に石になっていく……

「ここが最下層……って……！！」

前方に視線を遣った直後、僕は身動きが取れなくなった。別に疲れたとかそういう理由では無い。これは……原初的な、本能が恐怖を感じている。

視界の殆どには、石造りの廊下で占められているが、その奥に、悍ましい……厭、悍ましいという言葉すら生温い地獄が其処にはあった。

「何……これ……」

正に蟲地獄。凡そ億は超えるであろう無数の蟲が、その石室の中で蠢いていた。見ているだけで皮膚を持って行かれそうだ。

「どっじゃ、素晴らしいじゃろっ……」

背後からの声に、全身が戦慄する。先程この館の一室で聞いた、あの老獺、間桐 臓硯の声だった。

「はあ……ああ……」

「ふっふっふっ……世間知らずの子鼠が入り込んだ位で、いちいち騒ぐ必要は無い、という事じゃ。判ったかな、これが？魔術師？の世界じゃよ。」

目の前に立つ柳のような老人の視線は、私の心の隅々まで覗き込んでいるような感じがして、吐き気が出そうな程心地が悪くなる。それだけでは無い。

「ふむ、あの落伍者についてきたところを鑑みると、お主の目的も、矢張り遠坂の娘であったか。」

絶望、悲壮、恐怖、戦慄、憤怒……あらゆる負の感情が去来し僕の心を蝕んでいく。徐々に、徐々に、感情を削り取られていくような感覚。気付けば、額に玉のような汗を湛えながら、息を荒くしていた。

「ほっほっほっほっほっ……どうやら、相当鋭敏な感情を持っているようじゃ。どれ、此処は一つ……」

老獺が歩みを進める。徐々に私に近付き、そして……通り過ぎた。

「見てみたまえ。」

「はっ……あれは……！」

老獺がその杖で指した先に、彼女はいた。容姿は殆ど変っていないが、服は着ておらず、何より、その眼は虚ろだった。

「どれ、お主に機会をやるう。魔術師でもないただの小娘にしては違和感が多すぎるのでな。」

「何を……するの……？」

老獺はその口端を、正に妖怪の如く吊り上げた。

「お主にも我が間桐の教育を施す。何、あの落伍者が首尾よく聖杯を手に入れて来れば、お主への教育も一年で取りやめにしよう。」

……この妖はあやかし一体何を言っているのだ……？

「さあ、桜の居場所蟲の苗床に行くがよい。……助けたいのだろうか？」

「あ……ああ！！！」

直後、視界は黒い何かに覆われた。同時に、無数の何かが全身を這いずり回るような感覚。それは私を……

「うああああああ！！！」

身体中の、それも隅々に至るまで、あの蟲が這いずり回っている。そいつらは服の裏側からも侵入し、来ていた服は直ぐに意味を為さなくなつた。

「あ……綾……ねえ……」

誰よりも美しく、誰よりも激しい、自分の血を与えた僕の姉。彼女の名を呟き、僕は蟲の海に埋没していった。

……この夜、冬木の街から一人の少女が消え去つた……

オレがキャスターと出会ってから今日で一年……彼女について、更に詳しく知ることが出来た。

彼女の真名は玉藻前。かの鳥羽天皇が寵愛した美少女で、白面金毛九尾の狐だ。道理で狐の耳と尻尾が付いている訳だ。

更には、生前の壮絶な人生（狐生か？）とか、色々知ったが、何にせよオレが彼女に惚れていくのは目に見えたことだった。今ではもうラブラブ（？）である。

「……………」

喫茶店アーネンエルベ。「遺産」という意味合いを持つ店名のこの喫茶店は、所在している三咲町でも知る人ぞ知る隠れた名店だ。店長のジョージが作るイタリア料理は、メニューにこそ載っていないが、絶品である。因みに、この店の建造には、あの偏屈爺さんが関わっているらしい。

「何用で此処に呼び出したのか、聞かせて貰おうか、マジックガンナー？ Mademoiselle・Bleue？」

「いや、久々に日本にいたからさ。見知りの顔は拝んでおこうと思っただけよー。」

「全く……アンタが大っ嫌いな姉あねさんからの伝手だったから、何か急用でもあったのかと思っただじゃないか……マスター、コーヒーを一つ。」

寡黙な店長が頷くのを確認してから、自分の右側に視線を遣る。青いジーンズに白シャツという単調な服装。それとは対照的に、

燃えるような赤の髪が腰位まで伸びている。端正な顔立ちの中、空色の瞳が宝石のように輝いている。

「兎に角、元氣そうで何よりよ。？呪法使い？の玲慈君。」

「健康は何事にも況して重要だからさ。？魔法使い？の青子さん。」

蒼崎 青子。彼女は魔法使いである。こんな馬鹿げた人の紹介があるか、という意見もあるだろうが、これが事実なのだから仕方が無い。事実、彼女は『青』の名のついた魔法を扱う？魔法使い？なのだ。

ここで？魔術？と？魔法？の違いを説明しておこう。

？魔術？と？魔法？は？奇跡を起こす？という点に於いては共通だ。両者の差異は、？起こされる奇跡？の方にある。

？魔術？が起こす奇跡は、科学に因って実現可能なものに限られる。例えば、？火を起こす？という現象は、別に魔術など使わなくてもマッチ一本、ライター一つで事足りる。薪に火を付けるのに、いちいち呪文を唱える必要は無いのだ。

一方で？魔法？が起こす奇跡は、現代最新鋭の科学を使っても実現不可能なものだ。現在のこの世界に於いて、？魔法？は五つ確認されている。

- 第一の魔法、『無の否定』。
- 第二の魔法、『平行世界の運営』。
- 第三の魔法、『魂の物質化』。
- 第四の魔法、『虚数』。
- 第五の魔法、『青』

『無の否定』は、その名が示す通り、？無？という概念を？否定する？魔法。これはオレの推測だが、この魔法の使い手がこの世に現れた所為で、この世界の裏に魔術師などという人種が生まれることになったと思われる（何せ、？無？を？否定？しなければ、？魔法？などという神秘は？起き得ない？からである）。因みに、これの使い手は既に死亡しているらしい。

『平行世界の運営』は、選択の数だけ無限に広がる平行世界パラレルワールドを歩き来する魔法。簡単に言うと、？一時間前に仕事場から帰宅した世界？と？帰宅せずに今も仕事をしている世界？を歩き来するということだ。これの使い手は、キシユア・ゼルレッチ・シュバインオーグという奇天烈な爺さんで、オレはこの爺さんから聖杯戦争について聞いた。

『魂の物質化』は、真の不老不死を実現させる魔法なのだという。別名を『天の杯』ヘンズファイルといい、キシユア爺さんに因れば、これの体現者ユステイーツア・リズライヒ・フォン・アインツベルンが、冬木の聖杯で重要な役割を担っているとの事。

『虚数』については、オレも詳しい情報を知らない。名前を聞いたことがあるだけだ。ただ、キシユア爺さんからは、これの使い手はマキリという一族の者だったという事と、自分が冬木の聖杯の建造に立ち会った頃には、生きてはいてもどこにいるか判らない状態だったという事を聞いている。

『青』についても詳しいことは聞いていないし、聞くつもりも無い。何故ならこの魔法の使い手は、今オレの眼前に佇んでいる青子なのだから。ただ、青子は単にこの魔法へ？辿り付いてしまった？だけの魔法使いである事だけは、この場で言うておこうと思う。

「でさ、どうして橙子あんなやっのところに行つてたの？」
「あんな、オレは親の代から続く由緒正しき魔術用品マジックアイテムの仲買人ブローカーであり、オレ自身も作成者なんだぞ。それにな、姉あねさんはオレの御得意様なの。御得意様に商品を卸してきて何が悪いのさ？」
「君の隣で膨れてる子……ただの人間じゃないでしょ？」
「御主人様……誰ですか、その真つ赤な女は？」

ここに來て初めてキャスターが口を開いた。明らかに青子に敵意を向けている。先ず真つ先に毒が飛び出してくるのは、先刻承知であるが、別に止める必要も無いと、オレは思っている。

「青子っていう、オレの幼馴染で御得意様さ。ちつとも金を落とすていつてはくれないがな。」

「よろしく。君の名前は？」

「えっと……タマモです。宜しく。」

席を立つてタマモと名乗ったキャスターに握手をする青子。青子の至つて普通な対応に、キャスターは若干戸惑っているようだ。因みに、今のキャスターは、オレが黒い長ズボンに灰色の半袖シャツと黒い革の袖無しジャケットという洋装であるのに合わせて、オレンジと白のストライプ模様のミニスカートに白い半袖シャツに薄手で黄色のジャージを、袖を捲くつて着ている。

「んー、ちゃんとした実体はあるけど……その身体は魔力で生成されたものね。アインツベルンの関係者？」

「やっぱり見抜いたか。だが、この子はアインツベルンとは全く以て関係無い。詳しい話を聞かない？」

少し考える素振をする青子。

「そうね。聞いておきましょうか。」

「……なら、序でに僕にも聞かせてくれるかな？」

オレの背後から、聞いたことがある声が聞こえた。老人のものが、実に剽軽な調子を含んだ声……

「……どうしてキシユアの爺さんが此処にいるんだ……」

「はっはっはっ、噂をすれば影が差す、とはこのことじゃよ。」

それを自分から言うな、と心の中で呪詛を組み立てていると、爺さんは青子の隣の席に座った。

「では、その子はどういう存在なのかな？」

「……因みに爺さん、いつから話を聞いてた？」

「ん？ 無論、最初からじゃが？」

「……なら最初から声掛けようよ、カレイドスコープ万華鏡……」

「この爺さん、いつまで経っても相変わらずである。」

02・ouverture/le sacrifice est ? l'en

次回予告

ウェイバー・ベルベット。

彼の運命は、雷鳴の中動き始めた。

冬木にはまだ、日常が溢れている。

次回、Fate/Rhapsodie Lunaire

『3・prélude/lyhyme quotidien』

……それは、日常と非日常の混在……
EPILOGUE

03・prelude / 1・hymne quotidien

03 . . . prelude / 1・hymne
【参・前奏曲 / 日常 賛歌】
quotidien

「馬鹿にしゃがって……馬鹿にしゃがって、馬鹿にしゃがって！あれが講師のやる事か！！」

この日、ウェイバー・ベルベツトは憤怒の念に包まれていた。魔術教会の最高学府、倫敦時計塔の廊下を叫びながら歩いている。

「アイツ、僕の論文を読んで嫉妬したんだ。僕の才能を恐れたんだ！……だからみんなの前であんな真似を……ぬわあっ！！」

会心の作として送り出した自身の論文が頭ごなしに否定され、剩え気になっている家柄の浅さをネタに辱められた。旧態依然とした魔術協会に一石を投じる筈だった彼の論文は、単なる笑い話の種にされたのである。……如何に大人しい人物でも、これでは怒る方が正常だと言えよう。

「……痛ててて……」

「ああ、済まないね。大丈夫かい？」

衝撃音と共にウェイバーが蹲る。運搬係が運んできた配達物に躓いたのである。

「あ……い、いえ……」

「お、君は降霊科の学生か。講義はどうした？」

「あ、その……」

ウェイバーが当惑の表情を浮かべる。？馬鹿にされた？勢いで講堂を飛び出してきたのだから、当たり前といえば当たり前である。

「……あ、アーチボルト先生に用事を頼まれちゃって、それで急いでて……」

「……そうか、丁度よかった。これをアーチボルト先生に届けてもらえるか？」

必死になって言い訳を並べるウェイバー。どうやら運搬係はそれで納得したらしい。ウェイバーに物を預けるようだ。

「これ、ですか……？」

「頼んだよ。大事な物らしいから。」

「大事な物……」

？大事な物？をウェイバーに託し、去っていく運搬係。ウェイバーは託された？大事な物？を繁々と眺める。

「送り元は、マケドニア……？」

窓の外には雷鳴が響いている。何か思いついたのか、ウェイバーは図書館へと急いだ。

「コイツだ。」

誰もいない図書館で、ウェイバーは何やら調べ物をしている。

「ケイネスの奴が、近く極東の地で行われる魔術の競い合いに参加するって噂、本当だったんだな。」

ウェイバーは、自身に託された？大切な物？に目を向ける。そして、こつこつ呟いた。

「『聖杯戦争』……」

200年前、？始まりの御三家？と呼ばれるアインツベルン、マキリ、遠坂。三家の魔術師たちは、互いに協力し合い、あらゆる願望を実現させるといふ、『聖杯』の召喚に成功した。だが、『聖杯』が叶えるのは、ただ一人の祈りのみ……協力関係は、血で血を洗う闘争へと形を変えた。これが『聖杯戦争』の起源である。……以来、60年に一度の周期で、聖杯は冬木の地に再来、それを手にする権限を持つ者として、七人の魔術師を選択し……

「……？サーヴァント？と呼ばれる英霊召喚を可能とさせる。……」

……アーチャー、セイバー、ランサー、ライダー、アサシン、キヤスター、バーサーカー……七つの役割クラスに振り分けられた英霊サーヴァントが現界、魔術師の何れいずかが『聖杯』の担い手として相応しいか、死闘を以て決着させる。……

「ふう……」

多数の本が積み重なった机の前で、椅子に凭れ掛かるウェイバー。どうやら調べ物も佳境のようだ。

「『聖杯戦争』っていうのは、肩書も権威も要らない、真正正銘の実力勝負ってことか……この僕に持って来いの舞台じゃないか……あ……」

ウェイバーは何やらしたり顔をしている。直後、何かを見つけたのか、その表情に曇りが浮かぶ。

「……尚、サーヴァントの召喚には、触媒となる英霊の聖遺物を必要とする……聖遺物……」

一瞬悩んだウェイバーは、ケイネス宛の？大事な物？に視線を向ける。ナイフを取り出して、その？大事な物？の梱包を切り開く。

「……お、うわ……」

ウェイバーの表情が途端に明るくなる。その？大事な物？の中には、？血のように赤い布の切れ端？が入っていた。

十 十 十

「おっはよー、顕彰君！」

「お、大河か。いつも早いな。感心するよ、全く。」

私立穂群原学園。冬木市の西の山側に位置するこの私立学園は、自主性を重んじる自由な校風が特徴の高等学校だ。

「いつも早いつて、そう言う顕彰君はもっと早いじゃない。いつも何時起きなのよ？」

「問答無用の午前四時。どれだけ周囲の生活環境が変遷しようとも、これだけは小学生時代から一切変えていないぞ。」

時は9月、冬木の気候も秋口のそれとなりつつある。朝の涼風そ

よりと抜ける、1年A組の教室にいるのは、一組の男女のみ。

「へえ、羨ましいなあ。私なんて六時に起きるのがやっとよ。」

「それが？藤村 大河？の生活リズムであり、？命のテンポ？なんだ。それは乱さないに越したことはないし、その方が好ましい。」

オレの名前は藤野ふじの 顕彰けんしょう。私立穂群原学園に通う高校生だ。言わずもがな、歳は今年で16である。趣味は読書だが、自分で筆を執ることもある。将来の夢は、一応、推理小説家だ。

「？命のテンポ？かあ、相変わらず洒落た言葉だね。」

そんなオレの言葉に何やら入り浸っている女生徒の名は、藤村ふじむら 大河たいが。この冬木の街を取り仕切っている任侠組織、藤村組の大頭、藤村 雷画の孫娘だ。こんなんでも剣道五段という半端無い実力の持ち主で、別名は『冬木の虎』。そしてその『虎』を懐柔するこのオレに付いた渾名は『冬木の虎の調教師』。別に調教なんてやっている訳では無いのだが、同年代で大河と恋人じみた（向こうはそう思っていない可能性が高いが）関係にあるのは、オレを除いて他にはいないのである。そりゃあ、毎週日曜日には必ず一緒に冬木の街を散策するのが習慣になってはいるが、オレは軽い人間では無い。寧ろ重い方だと自負している。自負してはいるのだが……

「もう、私の事をちゃんと解ってくれるのは、顕彰君ただ一人だよ。」

……どうやらオレには、無意識の内に人を（特に異性を）誑かしてしまう癖があるようだ。天然の女誑しというものらしい。無意識だからその瞬間はオレも判らない。そして、気付いたら相手が勝手に頬を紅潮させているのだ。そうになると、オレは思わず「熱でもあ

るのか」と……後は御約束通りである。言っておくが、オレに下心というものは全く以て無い。

「おーす、藤村。……あらあ、噂の顕彰君も一緒かい。」

「音子だー、おーっす！」

「その名で呼ぶない！！」

「ああ、蛭か。相変わらず元気だな、お前は。」

あつたぼつよ！などと叫んでいる少女はほたけつか蛭塚 おとし音子。若干アルコール臭が纏わりついているが、それは彼女の家が酒屋であるからである。因みに、オレが彼女の事を名前で呼ばないのは、「音子」という名前が「男」の発音になるのを嫌つての事だ。彼女は、その発音で呼ばれるのを酷く嫌う。

「ところで、蛭、例の大吟醸、入荷してるか？」

「勿論、顕彰君の為ならどんなものでも……」

「こらー！ 顕彰君を持っていこうとするなー！」

何かを言いかけた音子と言い争いになる大河。まあ、何と平和な風景だろうか。因みにオレが音子に大吟醸の焼酎を注文した理由は、後々明らかになる。

「よし、それならいいんだ。後で店の方に顔を出すよ。ま、少なくとも大河は付いて来ることになるだろうがな。」

言い争っている為聞こえないだろうが、一応そう言い残しておく。そしてオレは、そつと教室を抜け出した。

「零観の奴、待ってるかもな……」

急ぎ足で誰もいない校舎を進む。階段を駆け上がり、二階の生徒会室に入る。

「遅いぞ、藤野君。」

「済まない、大河と蛭に絡まれてな……」

「三代目とネコ君にか……ネコ君は兎も角、三代目と仲良くしているというのは、男として捨て置けんな。」

「諦める。幾ら柔道有段のお前でも、藤村組には勝てないって。精々、病院送りにされるのがオチだろうよ。」

このがっちりとして背の高い男子生徒は、柳洞やなぎほら 零観れいかん。生徒会で書記をしている。冬木の東側の端に位置する寺、柳洞寺の放蕩息子だ。彼にはまだ7歳の可愛い弟がいるのだが、この生臭坊主には絶対に似て欲しくない。

というのも、この男、入学式で偶然顔を合わせた大河に一目惚れしてしまったようなのだ。以来、自然な流れで大河と仲の良くなったオレに、色々と話を持ち掛けてくる。だが、オレは悉くそれを断っている。

幾ら柔道で有段だとは言え、相手は任侠集団の愛娘だ。一つ間違えれば、間違いなく伸されるであろう。ただ、彼女の祖父、藤村雷画は零観の父である柳洞寺の住職とは、年始め博打で大勝負をするような昵懇の関係なのが、唯一の救いではある。

「では何だっつて君は三代目と仲良くしていられるのだ？」

「家が隣で一人暮らしと来れば、自然とそう言う関係にもなるものよ。」

オレはこの学園から徒歩で30分的位置にある武家屋敷に一人で

住んでいる。去年、事故で両親を亡くしたオレは、親戚の伝手を使って冬木市に来た。その際に、親戚の所有物であった武家屋敷に住みこむ事になったのだ。その為、その武家屋敷に掛かっている表札には、オレの苗字の『青砥』ではなく、その親戚の『百合草』という苗字を書いている。といっても、家そのものの所有者は、隣に住む藤村組だし、いざ買い手が付けば売られてしまう売り家に、一時的に住まわせてもらっているに過ぎない。

で、その武家屋敷の隣に所在しているのが、大河の実家である藤村組の大屋敷だ。そもそも、オレがこの武家屋敷に住むことになったのも、この街に来る時の藤村組の援助があったからに他ならない。そんなこんなで、大頭である雷画さんには、まるで孫のように可愛がられているのが現状だ。

「ふむ、俺はお前が羨ましいよ。」

「そんなことより、オレを呼び出した理由は何だ？ よもや与太話に付き合えというだけではあるまいな。疾く要件を述べ給え。」

「そうだな、お前には三代目とのデートについて……ぐぎゃ！」

「そんなことは自分で考えろ。」

顔面に一発嘔ましてから、足早に生徒会室の入口に向かう。こんなのと一緒に行ったら、時間が無駄になるだけだ。

「そ、そんな……友を見捨てるなんて……」

「見捨てるも何も、初めから協力関係なんて築いた心算つもりなんてこれっぽっちも無いがな。」

そう言い捨て、生徒会室の入口をピシヤリと閉めた。これの半年後、彼がオレの言った通りになったのは言わずもがな、である。

それと同時に、背後の空気が妙に刺々しい。……オレ、何か拙い
ことでも言ったか……？

「……と、取り敢えず代金はこちらです。」
「じゃ、はい。気を付けてね。」

取り敢えず代金を渡し、袋に入った最高級の酒を左手に下げる。
そして恐る恐る背後を振り返ると……

「……………」

「……………」

「おいおい、何なのさ、この小娘たちは……………」

一人の女性を、大河は羨ましそうに見つめ、音子は睨みつけてい
る。腰まで届く猫毛の髪は赤というより赤紫色で、分け目からびよ
んと癖毛が飛び出している。青い瞳が特徴的なその顔には、右の眉
の上から左の頬に掛けて傷の痕が走っている。服装は「大戦略」と
いうロゴが入った白いＴシャツに青いジーンズというシンプルなも
のだが、服の上からでも判る位、スタイルは抜群だ。

「この人が……………」

「同居人……………」

「おう、そうさね。」

「この薄情者ー！」

「あ、音子！」

そう叫んだ音子が、猛スピードでオレに殴りかかってくる。オレ
は大吟醸を袋ごと女性に投げ……

「よっつ……………」

……音子の拳を紙一重で回避。刹那、重心の崩れた音子の脚に脚
払いを決め、倒れ込む音子を抱き抱える。舞踊の如く滑らかな動き。
そして……

「暗示」
「気絶」

魔力を込めて、一言、小さな声で言葉を紡ぐ。すると音子は、糸
が切れた人形のようにオレの腕の中で脱力した。

「記憶」
「改竄」
10分
「前から」
「現在」

更に一節だけ紡ぐ。……よし、これで万事巧くいく筈だ。

「あ、親父さん。娘さんは勢い余って気絶しているだけなので、奥
の方に運んでやってください。」

「ああ、わかったよお。」

父親は気絶した娘を抱えて奥に運んでいく。

「さて、オレ達も帰るか。」

改めて外に出る。外では例の女性が大吟醸入りのビニール袋を右
手に下げて、オレの事を待っていた。

「お、終わったかい。アンタも随分と血気盛んな娘に気に入られた
もんだねえ。」

「やれやれ、全くだ。」

「あの〜……」

親しげに談話するオレ達の脇で、大河が何やら言いたそうな感じでこちらを窺っている。

「お姉さんは、顕彰君とどういう関係なんですか？」

「ん〜、何つつたらいいのかねえ……」

「……オレから説明するよ。」

ボリボリと頭を掻きながら視線を明後日の方に向ける女性。

「彼女はフランスス・ミルウェイ。イギリスの生まれで、死んだオレの両親が懇意にしてた人だ。」

その後、大河にこの女性、『フランスス・ミルウェイ』の事を説明しながら歩いた。話しながら移動していたので、いつの間にか家の前うちに着いていた。

「ほう、タイガの爺様は酒も博打もいけるのか。こりゃ、一度顔を出しておいた方が得かも知れんね。」

「じゃ、また明日な。」

「うん、顕彰君もフランススさんも、今度家うちに遊びに来てね〜！」

そう言った大河は、自分の家の方へと駆けて行った。

「……いやあ、アキラは嘘が巧いねえ。御蔭で助かったよ。」

「……感謝するのはオレの方だよ、？ライダー？。お前が巧いこと乗ってくれたのが救いさ。」

「さてさて……アタシは早速、噂の？大吟醸？とやらを頂くことにするさね。」

そう言いながら、フランスス・ミルウェイ……元い、ライダーの
サーヴァント？フランスス・ドレイク？は、武家屋敷の門を潜って
いった。

【玲慈と綾嶺のles 舞台裏 coulissses】

玲「どうも、紫苑 玲慈だ。」

綾「蘇芳宮 綾嶺です。」

玲「今回は日常回か。」

綾「何だか、顕彰君が士郎に見えてくる……」

玲「兎に角、フランス姐さんの情報^{マトリクス}を公開します。」

【クラス】ライダー

【マスター】藤野 顕彰

【真名】フランスス・ドレイク

【生別】女性

【身長・体重】170cm/53kg

【属性】中立・悪

【ステータス】

・筋力：D

・耐久：C

・敏捷：B

・魔力：E

・幸運：EX

・宝具：EX

【クラス別スキル】

対魔力：D

シングルアクション

一工程に因る魔術行使を無効化する。

魔力除けのアミュレット程度の対魔力。

騎乗：

騎乗の才能。

後述するスキル『嵐の航海者』の発動により、通常の騎乗スキルは失われている。

【固有スキル】

嵐の航海者：A+

船と認識されるものなら、どんなものでも乗りこなせる才能。

集団のリーダーとして必要な能力も兼ね備えている特殊スキル。

ランクA相当の軍略、カリスマの効果も併せ持っている。

星の開拓者：EX

人類史に於いてターニングポイントとなった英雄に与えられる特

殊スキル。

あらゆる難航、難行が？不可能な儘？？実現可能な出来事？になる。

連携攻撃：A

複数での攻撃に長けていることを示す能力。

他者との連続、及び同時に攻撃を行う際、双方の攻撃の威力が底上げされる。

黄金律（偽）：B-

略奪行為に因る金銭の蒐集力、及び支配力。

海賊としてのスキルを大きく逸脱し、国家予算クラスの額を集める事も可能。

ただし、蒐集した金銭は湯水の如く使われる為、極一時的なものではない。

玲「……相変わらずハンパねえな、幸運の値。」

綾「『刺し穿つ死棘の槍』を素で躲す位の幸運だ。因みに、他に幸運EXを持つのは、ギャグ補正が掛かった大河だけか。」

玲「飛び込んできた敵が何も無い場所で躓いて絶対有利とかあり得るからな……おお、怖い怖い。」

綾「では、顕彰君の情報もどうぞ。」

【名前】藤野 顕彰

【誕生日・血液型】5月3日/A型

【生別】男性

【身長・体重】168cm/60kg

【イメージカラー】セルリアンブルー

【属性】木

【特技】文章執筆、脚本

【好きなもの・苦手なもの】特になし/特になし

【天敵】特になし

【概略】

・物語開始時点の年齢は14歳（誕生日で15歳）。顔立ちと髪型はEXTRAの男性主人公の様に、整ってはいるんだけど特徴が薄い。髪の色は黒に近いモスグリーン。取り敢えず、着るものに特徴という特徴は無い。彼も魔道の家の出身者なのだが、聖杯戦争が始まる一年前に両親が死亡。が、魔術刻印は既に受け継ぎ済みだった

のと、四代程続いた家の者としては破格の魔術回路を持っていることもあり、魔術師としては非常に優秀である。ロシア語の呪文を基盤とし、主に暗示を得意とする。その一方で、植物を操る魔術であれば右に出る者はいない。第四次聖杯戦争時は、穂群原学園1年A組に所属しており、藤村 大河とは同級生の関係である。属性は五行説の木。彼の起源は『収財』。

玲「……何気に強くな？」

綾「起源が『収財』だからな……効率よく財を収集できる才能を秘めている。金を積めば積むほど強くなるエルドラゴライダーとは、恐ろしく相性が良い。後、金食い虫な魔術を使う遠坂家の者とも以下略……」

玲「じゃ、そろそろ次回予告に行くか。」

次回予告

鳴り響く戦鐘。Cri de guerre

？先天性の悪？は？正義の味方？の事を知る。
そして、とある少女の魂は、親友の聖遺物を前に胎動を始める。

次回、Fate/Rhapsodie Lunaire

『4 . pr ? l u d e / ? m e d ' u n e r ? g r e s s i o
』n

……その蛇は、親友の仇……

04・prelude / med - une regression] pro
【肆・前奏曲 / 魂 の 回帰 「前 篇」】

「何度見ても如何^いわしい仕掛けですね。」

遠坂邸の地下。遠坂 時臣氏の工房に降りてきたのは、僧服^{カソック}を着た若い男性。名を言峰 綺礼という。元は聖堂教会に属し、今は遠坂家当主、遠坂 時臣師の徒弟となつて、魔術の修業に励んでいる？ 異端者？だ。

「ふむ、時計塔からの報告だ。ロード・エルメロイが、新たな聖遺物を手に入れたらしい。……これで、彼の参加も確定のようだな。」

彼の目の前にあるのは、俗にブラックバイン振り子と呼ばれる実験器具によく似た機器だ。振り子の錘の部分には、遠坂伝来の魔力の籠った宝石が取り付けられ、その石の筆先に振り子の紐の部分を伝つてインクが流れるように仕掛けてある。

この振り子の魔石には対になるもう一つの魔石がある。もう一つの魔石をペンの先に取り付けて字を書くと、この振り子の魔石も同時に動いて字を書く、という仕組みだ。言わば魔術社会におけるフアクシミリといったものである。

対になるもう一つの魔石は今、此処とは大地を挟んで反対側に存在している。魔術協会の最高学府、倫敦時計塔。其処にそのもう一つの魔石を持った遠坂の間諜が忍び込み、情報を掻き集め、今こうして、こちらに連絡を寄越しているのである。

「未だ二つの空席があるというのは、不気味ですね。」
「何、時が来れば聖杯は質を問わず七人を用意する。そう言う人数合わせについては、まあ、概ね小物達だからな。警戒には及ぶまい。」

時臣師はそう言い切った。余程自信があるのだろう。でなくば「警戒には及ばない」などとは言えない。

「用心について言うのなら、綺礼、この屋敷に入るところは誰にも見られてないだろうね。」

「御心配無く。可視不可視を問わず、この屋敷を監視している使い魔や魔導器の存在はありません。それは
「それは私が保証します。」

工房の一角に、影が現れた。その影は徐々に姿を確かにしていき

……

「如何なる小細工を弄そうとも、間諜の英霊たるこのハサンめの眼を誤魔化すことは叶いません。」

……それは黒い人影になった。その顔には人の顔の骨のような白い仮面を付けている。暗殺者のサーヴァント、ハサン・サツバーハの一人である。

「マスターの身边には現在、如何なる追跡の気配も無し。……どうか、御安心下さいませよう……」

深々と臣下の礼を執るハサン。彼らは綺礼のサーヴァントとして召喚されている。

「聖杯に招かれたサーヴァントが現界すれば、間違いなく父に伝わります。他の魔術師が行動を起こすのは、まだ先の事と思われず。」

「前回の聖杯戦争に引き続き、今回の監督役として極東の地に赴いたのは、他にもない綺礼の父、言峰 璃正氏だ。今回、遠坂 時臣は監督役の息子と手を組んでいるのである。」

「アサシン、この場はもういい。引き続き、外の警戒を。」

「御意……」

そう言うのとほぼ同時に、彼は消え去っていた。霊体化したのである。

サーヴァント、即ち英霊は、元来霊体であり実体を持たない存在だ。それに魔力を注ぎ込み、実体化させるのが魔術師マスターの役割であり、それを英霊召喚と呼んでいるに過ぎない。事実、英霊の魂をこの世に引つ張ってくるのは、魔術師では無く聖杯の仕事だ。

「だが、それも時間の問題だ。いずれこの屋敷の周囲にも他のマスターの放った使い魔共が、右往左往することになるだろう。」

そう言いつつ、時臣師は再び筆記を開始した魔石の振り子に近づいていく。

「それは……？」

「別件の調査だね。アインツベルンのマスターについて、情報を集めていたんだ。」

時臣師は筆記が終わったばかりのロール紙をナイフで切り取り、
逐一その情報を確認していく。

「今から九年ほど昔になるか……純潔の血統を誇ってきたアインツ
ベルンが、唐突に外部の魔術師を婿養子に迎え入れた。」
「……………」

綺礼は、時臣師の話を静かに聞いている。

「元々錬金術ばかりに特化したアインツベルンの魔術師は、荒事に
向いていない。過去の聖杯戦争での敗因も、全てそれが原因だった。
それでいよいよ連中も痺れを切らしたのだろう。招かれた魔術師が、
如何にもという人物だった。」
「……………」

時臣師は其処で一旦切ると、綺礼の方へと向き直った。

「衛宮 切嗣……『魔術師殺し』と呼ばれた男だ。」

十 十 十

「『魔術師殺し』、か……………」
「彼の事が気になるのかい？」

立派な家具類が並ぶ遠坂邸の居間には、現在、二人の人物がいる。

一人はこの家の当主、遠坂 時臣。そして、もう一人は……………」

「気になるとも。魔具を精製し鍛錬する血筋の者のは、最終的には己が一部を使った魔具を錬鉄するものじゃ。この『魔術師殺し』^{衛宮切嗣}が使う兵器の一覧に、実に興味深い代物があつてな。」

……古めかしい口調で話す、水干姿の少女^{ロン}がいた。

ワシの名は萩野谷 沙織。この世に生を受けてから、以来十年位^{このかた}は生きている。魔具の精製を主な生業とする、萩野谷一族の末裔だ。因みに言うと、ワシのこの服装……山吹色の水干に特別な意味は無い。強いて意味を上げるなら、機動性の向上だろうか。まあ、要はそれ位のものということだ。

「しかし、いいのかい？ 君の一族は間桐と協力関係では……」

「はっ、臆^{ソノルケン}の言分なぞ、当の昔に失効しておる。元より冬木は、我ら萩野谷が表を、お主ら遠坂が裏を管理する土地じゃった。其処に無理矢理割り込んで来て、ワシらの承認も得ずに住み着きおつたのじゃ。寝返られて当然じゃわい。」

冬木の地は元来、強力な霊脈が眠る土地だ。遠坂は古くから萩野谷と共にこの地を管理している一族。表の萩野谷、裏の遠坂と呼ばれた程だ。

其処に余所者が足を踏み入れたのは、今から二百年程前の事だ。根源に至る道へと開く孔^門を開く為、聖杯とやらを降霊する。その為に裏の遠坂は、マキリ、アインツベルンと手を組んだ。

元々は第三魔法^{ヘウンズファイナル}を再現したいアインツベルンが、その手段として、万能の願望器である聖杯を求めたことが発端だった。今より約千年も前から続く妄執の果て。その結果として、冬木の地に聖杯降臨の魔術式^{システム}を築き上げた。

魔術式そのものは単純だ。冬木の霊脈が落ちる場所、柳洞寺といシステムう寺の地下に存在する大空洞に、魔力を通す魔術回路で出来た魔法陣を敷く。それも、直径数キロという単位の巨大なものだ。この魔法陣が聖杯降臨の魔術を稼働させるエンジンとなる。これの事を連中は？大聖杯？と呼んでいるらしいが、ワシにとつては与り知らぬことである。

魔術を稼働させるためには、魔術回路で出来た魔法陣に魔力を通さねばならない。しかも、半端無く莫大な量を、一息に流す必要がある。その為にアインツベルンは、とある存在に目を付けた。

この世界には無数の人間がいる。総じて？人類？と呼ばれるその存在は、複雑怪奇な思考体系を持ち、その総数を際限無く増やすが故に、人間はいつしか、意識無意識を問わず、？幻想？というものを世界に要求した。人は実に弱い存在もので、戦や災害で容易く命を落とす。そういう弱い人間は、自らを救済する存在として、人を越えた？英雄？を求めた。

事実、？英雄？は存在する。人の身でありながら人ならざる偉業を成し遂げた者、善悪はどうあれ、人はそう言った？英雄？を信じることで、弱い肉体の中に、強靱な精神を持ち得るようになった。世界がまだ一つだった頃から既に、人は何事にも決して折れぬ強き心を持ち得ていたのだ。

だが、幾ら傑出した？英雄？が現れようと、有象無象の人々の命が脆いことに変わりない。そして、強い心を持ってしまったが故に、人々は意見を違え、互いに争うようになってしまう。

神代に於いて、戦争とは神々の争いだった。人々は災害としてその余波を受けていたに過ぎない。その災害よばから民草を護る為に立ち上

がった？英雄？という存在が、神の世界のものだった戦争を、この世に降臨させてしまった。

皮肉にも、戦争がこの世に降りたことに因って、死ぬ人間は圧倒的に増えた。同時に、その死んでいく者たちの為に戦うべく、人を越える者たちも増えた……こうして、世界には？英雄？は増えていった。

だが、例え英雄とて人の子。例え神の血を交えていようと、人である以上、死という運命からは逃れられない。そうして一人、また一人と、英雄は死んでいった。

だが、人々に望まれた（望まれない）？（反）英雄？は、死してなお人々の心に留まり続ける。人々はその華やかな偉業を（その畏怖すべき悪行を）、子々孫々まで語り継いでいく。そうして？英雄？は死後、？英霊？となる。

？英霊？は？英霊の座？という、時間や空間の概念を超越した場所に、その超高純度の魂を保存する。この？英霊の座？から、必要に応じて魂の複製品コピーが現世に呼び出され、その人を超越した力を以て？人類？を救罪する。

今言った通り、？英霊？とは超高純度の魂だ。そして、？座？から現世に呼び出される際、その魂は、同じ位高純度の魔力でコピーされ、現世に召喚される。アインツベルンはこの？英霊？に目を付けた。

超高純度の魔力に変換できる？英霊？を召喚し、その魂のコピーが？座？に帰る時の莫大過ぎるエネルギーを利用しようと考えたのだ。

この世界の外、？英霊の座？があるとされる場所には、？根源の渦？というものが存在するらしい。ありとあらゆる世界の設計図にして、全ての過去、現在、未来が混在しているという場所。無論、人が未だ到達していない地平である。魔術師は、其処を指して己の魔術を極めるといふ。

聖杯は言わば近道を切り開く為のもの、厭、近道そのものだと言える。そうして辿り着いた者は、あらゆる奇跡を可能にするらしい。更に言えば、孔門を開く為に必要なのは英霊の魂だけであり、その魂を呼び寄せ、この世界に留まらせる為に必要な魔力を余剰だとするなら、その魔力だけで？この世のあらゆる願いを叶えることが出来る？程の量が、聖杯には注がれている。故に？万能の願望器？。有象無象の有り触れた願いは疎か、幾代も続く崇高な魔道の悲願ですら叶えてしまう……聖者の血を受けた？聖杯？そのものではないが、それに匹敵する機能を備えた大儀礼魔術……それが、この冬木の地に降臨する？聖杯？だ。

しかし、この？聖杯？には欠陥があつた。この？聖杯？が叶える願いは、ただ一人の祈りだけだったのである。御三家の協力関係はあつさりと棄却され、聖杯の所有権を巡って争いが起きた。これが聖杯戦争の始まりである。

我ら萩野谷の一族は、自らの土地を侵害された拳句、その土地を戦場にされたのだ。当時の当主が怒るのも、無理の無いことである。

「土地を貸す代りに、お主ら御三家から少しずつ魔道の血と智慧を頂戴して、ワシら萩野谷は裏の裏に収まる事になったのじゃった。御蔭で、ワシの身には御三家の血が全て少しずつ流れておる。」

我ら萩野谷は、冬木を聖杯降霊の為の土地として貸し出す代償と

して、御三家から一人ずつ、養子をとった。三人の養子はそれぞれ萩野谷の者との間に子を産み、代を重ね、血を濃くしていった。同時に、各家から魔道の知識も貰い受け、萩野谷は正真正銘魔道の家系となった。

「しかし、君はよく臍硯の古い名を知っているね。マキリ・ゾオルケンという名は、御三家の間でさえ呼ばれなくなりつつある名だ。」
「ワシらは古くから魔具に匹敵する武器を作り上げてきた血族じゃった。かの狂匠、村正の血を引く一族。呪われた武具を鍛造する者たち……それ故にワシらは、血と共に？記録として？記憶を引き継ぐという特異体質を持つ一族となった。自分らの作った武具が、誰の手に渡り誰を害するのか……それを知る為には詮方無きこと。その特異体質を元に、ワシは魔術刻印を受け継いだ状態でこの世に生れ出た。勿論、血に刻まれた初代からの記憶は？記録として？受け継いでいる。その所為か、ワシは物心付いた時から、若干達観してしまっておるでな。御蔭で、浮世を楽しむので精一杯じゃ。」

時臣は、ふむ、と行って、自身の書卓の椅子に腰かけた。窓の外は既に夜。徒弟の言峰は眠りに就いている。御蔭で遠坂邸は、自分たちのいる居間を除いて、静まり返っている。

「ところで時臣……お主、桜を間桐に差し出したそうじゃな。」
「ああ。幾ら長い時が経つと言え、遠坂と間桐、両家の間には盟約がある。共に根源を目指すと誓った盟友の頼みだ。無下に断る訳にもいくまい。」

「……………」
それを聞いたワシは、一旦俯いた後……

「……………くくくくく……………くふふふふふ……………」

……くつくつと、笑いを堪えた口から零れ落ちるように笑った。

「……何が可笑しい？」

「ふふふ……厭何、お主が余りにも滑稽じゃから、つい……」
「滑稽だと……私が……？」

時臣の視線に殺気が灯る。当然だ。目の前の男は、滑稽だ、などと言われてプライドが傷つかない程鈍感では無い。

「くく……では聞くぞ。あのマキリが、桜に真面な？鍛練？を課すと思うか？」

「……」

「まあ、ワシは先代、先々代は元より、初代から記憶を受け継いでいるから知っているのかもしれんがな。マキリの？鍛練？に頭の良さは必要無い。何せ、身体に直接？教え込まれる？のじゃからな……」

「……」

殺気を収めた時臣は、下に俯いて黙ってしまった。然もありなん、盟友の口端に乗せられて送り出した娘が、よもや蟲共に蹂躪されていようとは、夢にも思つまい。

「ふつ、魔術刻印の事を考えたのだろうが、それならマキリでは無く、ワシらに桜を預けるべきじゃったな。これではあの子が浮かばれん。あの妖怪の事じゃ、恐らく桜の事を、次世代の魔術師を産み落とす為だけの生産装置どっくとしてしか見ておらんぞ。」

「……私は……どうすれば……」

時臣が両手で顔を覆って頂垂れた。ワシは立ち上がって外に出よ

うとする。

「……今は何もできん。あの妖怪に何を言っても通じることはないじゃろつ。」

「……………」

扉に手を掛け、手前に開く。外に出切る直前、ワシは足を止めて軽く振り向いた。

「……飽く迄？今は？の話じゃ。聖杯戦争が始まれば、ドサクサに紛れて何とでもできよう……」

「……………桜を……………助け出すのか……………？」

ふ、と息を抜いてから、部屋の外に身体を向ける。

「さあ……………じゃが、傍観を決め込む筈だった間桐からマスターが現れておる。サーヴァントのクラスは、手駒マスターを考慮すれば十中八九、バーサーカーじゃろつ。誰か事情を知っていて正義感の強い奴なら、サーヴァントを始末する序でに、マスターと間違えて臓硯ソウルケンを殺してしまうかもしれんのか……………」

くつくつという笑いを抑えながら、ワシは居間を後にする。閉めた扉の奥から薄らとした慟哭が聞こえたが、意識して聞かないようにした。

「……………」

カツカツと冷たい音を立てながら、廊下を歩いていく。出入口エントランスから外に出る。

「……………」

周囲に使い魔や魔導器の存在は目視できない。流石に、この時点で行動を起こすマスターなど、そうはおるまい。

「……………」

が、視線を感じる。二つ。一つは敷地の外側から。もう一つは……

「……………」

「……………」

「……いるんだろう、アサシン。」

「ふ……………」

……視線を感じた背後に振り向くのと、漆黒の暗殺者^{アサシン}がぼつと現れるのは、ほぼ同時だった。

「……お前の主に伝えてくれ。ワシは用が済んだので帰る、とな。」

「……………」
御意。」

そう言いながら、黒い人影は姿を消した。ワシはもう一つの視線の方へと歩みを進める。

「遅えぞ。御蔭で待ち草臥れちゃった。」

「済まぬ。詰まらぬ話が少々長引いてしまった。」

ワシに視線を送るのは、一人の青年だった。髪は茶色、瞳は翠。端正で甘い顔立ちは、女性受けが良さそうだ。服装は深緑のジャージに黒いスラックスという地味なもの。だが、それが却って彼を闇の中に透け込ませていた。

「やれやれ、貴族の話し相手たあご苦労なこった。」

「無駄口が叩けるくらいに精神力は残っているみたいだのう。では帰るか、ワシらの家に。」

「おう。さっさと帰って、茶でもしばこつや。」

ワシは青年……アーチャーのサーヴァント、ロビンフッドと共に夜の帳へとその姿を埋めていった。

マトリクス
情報 開示

【クラス】アーチャー

【マスター】萩野谷 沙織

【真名】ロビンフッド

【生別】男性

【身長・体重】173cm/72kg

【属性】中立・善

【ステータス】

・筋力：C

・耐久：C

・敏捷：B

・魔力：B

・幸運：B

・宝具：A

【クラス別スキル】

対魔力：D

シングルアクション

一工程による魔術行使を無効化する。

魔力除けのアミュレット程度の対魔力。

単独行動：A

マスターからの魔力供給を断つても自立できる能力。

ランクAならば、マスターを失っても一週間は現界可能。

【固有スキル】

破壊工作：A

戦闘を行う前の準備段階で相手の戦力を削ぎ落とす才能。

ランクAならば、相手の進軍前に六割近い兵力を戦闘不能にすることも可能。

ただし、このスキルのランクが高い程、英雄としての霊格は低下していく。

精霊の加護：B

精霊からの祝福に因り、危機的な局面に於いて優先的に幸運を呼び寄せる能力。

その発動は敵に認知されていない状況のみに限定される。

千里眼：C

視力の良さ。

遠方の標的の捕捉、動体視力の向上。

仕切り直し：C

戦闘から離脱する能力。

また、不利になった戦闘を開始ターンに戻し、技の条件を初期値に戻す。

【名前】 萩野谷 沙織

【誕生日・血液型】 2月22日 / B型

【生別】 女性

【身長・体重】 133cm / 34kg

【イメージカラー】 ブロンズグレイ

【属性】 金

【特技】 魔具の鑄造

【好きなもの・苦手なもの】 武器 / 現代機器

【天敵】 ?ばそこん?とか言うもの

【概略】

・年齢は物語登場時点で9歳（誕生日で10歳）。顔立ちは三咲町のカンフー少女に似ている。髪は短いシャギーカットで、色は鋼色。瞳も同じく鋼色。水干を好んで着用する。先祖代々曰く付きの武器を鑄造する一族、萩野谷の末裔。先祖からの記憶を、血を媒介にし、記録として受け継ぐという特殊体質の持ち主。様々な事象を知りながら生まれてきた所為か、性格は非常に達観しており、物事を客観的に観測する術を身に付けている。また、口調が何とも古臭い。魔術兵装の鑄造を得意とし、材料と工房さえあれば、宝具クラスの代物も鑄造可能。また、金属を自在に操る魔術の使い手でもある。第四次聖杯戦争時は、遠坂 時臣の参謀役として協力する筈だったが……。属性は五行説の金。彼女の起源は『鍛練』。

……後篇に続く……

【伍・前奏曲 / 魂の帰還】「後篇」

「今日も今日とて遠坂邸。幾ら聖杯戦争が近くてやることが少ないからって、貴族の暇潰しに毎日付き合わなければいけないというのは、些か酷というものである。……たまには一日中工房に籠っていたいものだ……」

「……おお、凜殿ではないか。今日から禅城の家で世話になるそうだな。」

「ええ、そうよ。……貴女も此処に残るの？」

黒髪ツインテールのあかいあか……げぶんげぶん……時臣の長女、遠坂^{とおさか}凜^{りん}が、身の丈の半分は超えている大きさの赤いスーツケースをえいやえいやと引き摺りながら、ワシの前に躍り出た。

「無論じゃ。ワシの父と時臣殿は懇意の仲じゃったからな、娘であるワシが残るのは道理という奴じゃよ。それに……」

「それに……？」

「……聖杯戦争という代物には興味がある。過去の英霊を召喚して死合わせるといふのも、また良い趣向じゃ。ワシが好む聖剣魔剣の類と出会う絶好の機会かもしれん。」

まあ取り敢えず、ワシのアーチャーが生前から知っている剣だけでも、御目に描かれれば幸い、といった感じの調子ではあるが。

「……そう。じゃあ、貴女も聖杯戦争に参加するのね？」

「いやあ、それは無理じゃ。……ほれ、見ての通り、ワシには令呪が無い。令呪が無い者は、サーヴァントは従えることが出来ん。ワシには参加資格が無いのじゃよ。」

「じゃあ、何で残るのよ。お父様を護るのは綺礼の役目でしょ。貴女の役目は何なの？」

因みに、ワシのアーチャーの令呪は、どうやら魔術刻印と同様に使わないと浮かび上がらないらしい。更に、回数制限が無い代わりに、性能が半分に落ちているとか。全く、使い捨てでも高性能な普通の令呪が使えるマスターのサーヴァントを相手取ってピンチになった時にどうやって斬り抜けるべきか、それが今現在、真っ先に解決しなければいけない問題だな。

「まあ、あれじゃ、参謀役という奴じゃ。お主は三国志を知ってるか？」

「うん、漫画で読んだことがあるわ。三つの国の主が、色んな仲間と出会って、他の国と戦っていく話でしょ？」

「うむ。その三国志に於いて、蜀の国を治めた劉玄德……」

「……ゲントク？……」

「……劉備の事じゃ。で、その劉備に仕えた軍師は誰かな？」

「知ってるわ。諸葛孔明でしょ？ 確か？三顧の礼？の後から劉備に仕えたのよね。」

「うむ。時臣殿にとってワシはその諸葛孔明の立場じゃ。主の勝利の為に最適の策を練り上げる。それがワシの役目じゃよ。」

……尤も、時間の大半は時臣の暇潰しに費やされると思われるがな……

「じゃあ、貴女も手を抜いたりしない事。貴女が作った作戦でお父様が傷ついたりしたら、許さないんだからっ！」

「おお、それは怖い。精々精進すると致そう。」

そう言つて道を空ける。其処を凜がゆっくりと通り過ぎていく。
エントランス
正面出入口の扉に差し掛かった所で、その歩みを止めた。

「貴女、綺礼と同じような口振りをしているけど……」

「……………?」

其処に立つた儘、振り返らずに言った。

「……私、貴女の事は好きよ。お父様をお願い。」

「判った。時臣殿の事は任せろ。」

ワシがどう返すと、彼女は満足そうに外へ出て行った。

「……ふ、序でに妹も任されたぞ。」

独白気味にそう誰もいない空間に告げ、ワシは昨晚、時臣と語り合つた居間へと足を踏み入れる。

「おや、君かい。」

「約束通り、今日も来てやつたわい。」

……やれやれ、それがこれから毎日付き合つという約束とは、洒落にならん全く……と心中で愚痴っていると、ドアをノックする音が聞こえた。

「……………失礼します。」

扉を開いて現れたのは、言峰 綺礼であった。相変わらず、幽鬼

のような男である。

「丁度いい所に来た。手配していた聖遺物が今朝、ようやく届いたよ。……二人共、見給え。」

そう言われて、時臣の視線の先に視線を落とす。綺礼も近付いて？それ？に視線を向ける。

「これは……」

「これが聖遺物……何かの化石か？」

しかし……これは蛇の化石……か……？

突如、フラッシュバック。何かの風景が頭の中に直接投影される。

これは……死ぬ間際の人の視点だ。

黄金色の鎧を纏った青年。彼はワシの方……死の淵に立たされている人を見ている。

彼らは恐らく、親友という奴なんだろう。共に生き、共に戦い、共に生き続ける筈だった二人。死の間際で、ワシが視点を預けている者に、彼はこう言った。

『何故泣く？ 我の傍らに身を置いた愚かさを、今になって悔いるのか？』

彼の言葉を聞いて、もう一人の彼はこう答えた。

『そうでは無い。この僕が亡き後に、誰が君を理解するのだ？ 誰

が君と共に歩むのだ？ 朋友よ……これより始まる君の孤独を思えば、僕は泣かずにはいられない……」

そうして、彼は灰燼に帰した。ブツツと、電源が切れるように、視界は真っ暗になった。

……暗闇の中、外界からの声に目が醒めた……

「ふふふ……遥かな太古、この世で初めて脱皮した蛇の抜け殻の化石だよ。これを媒介にして、首尾良く？アレ？を呼び出したなら、その時点で……」

「……」

ふと気付くと、そこは遠坂邸の居間であった。ワシの他には家主の時臣とその徒弟の綺礼がいる。ワシは、白昼夢でも見ていたのだろうか？

「……我々の勝利は確定する。」

時臣はいつもの調子に自信を上乗せしたような声で、そう言い切った。

「綺礼、君も召喚に立ち会つといい。出来れば璃正氏も一緒にいいな。」

「父上もですか？」

「ああ。上手くいけば、我々の勝利はそこで確定する。その瞬間を一人で過ごすのはどうもいけない。」

「……『ギルガメッシュ』……」

ふと気付くと、何やら素知らぬ名前を口に出していた。それも、

恋人のように、愛おしい者と呼ぶ時のように……

「!?! 何故君がその名前を……?」

「会わなくては……僕の名を……忘れる前に……」

「どうした? 大丈夫なのか?」

(言峰/名前も知らない男)が(ワシ/僕)の事を心配している。そんな事より(黄金の男/ギルガメッシュ)に会わなくては……会って、話を聞かなくては……(あの夢の真実を/今此処にいる者は僕の……)……………

「時臣……ワシも……召喚の儀式に……同席……させる……」

「? まあ、そう言う事なら断りはしない。君も重要な役回りの一人だからね。」

「よかった……ああ、ギルガメッシュ……僕の……僕の……」

その後、ワシは夜まで気絶していたらしい。不思議な事に昼間の事は余り覚えていなかった。ただ、蛇の抜け殻の化石を見るたびに、胸には悲しみが去来し、ワシは知らぬ内に、密かに慟哭していた……

十 十 十

「はあっ!! ころか、先生!!」

「うむ、そうだ。お前は非常に呑み込みが早いな、ギユンター。」

「えへへ、先生に褒められると、何だか照れるな……」

極東の冬木という地、其処の西の端にある寺、円蔵山柳洞寺。だ

だつ広い境内で拳法の稽古に励んでいるのは、桂かつら 義雄太ギョウターという名の少年だ。今年で十歳だと聞いている。名前といい見た目といい、純粋な東洋系では無いのだろう。

「よし、では次だ。儂の動きをよく見ているといい。」
「はい！ 先生ー！」

その少年に稽古を付けている儂は、名を李り 書文しょぶんという。実のところ、儂は人間では無い。妖魔の類かと聞かれれば違つと応えるし、元は歴とした人間だつた。

「はっ！……今を裡門頂肘という。この一撃は敵の心髄、人体急所の一つ？心窩？を的確に撃ち貫く……うむ、例えるならば槍のよくな一撃だな。」

「先生！ ？しんか？つて、身体の何処の事ですか？」

「うむ。？心窩？とは、鳩尾の事。胸の中心に触れてみる。骨があるのが判るだろう？」

「……はい！」

「その骨を下になぞってみる。腹の手前で窪むだろう。其処が鳩尾心窩だ。」

「つまり、？裡門頂肘？は、此処を目掛けて飛んでくるという訳ですね？」

「大方はその理解でいい。ではギョウター、お前の拳はこれを如何にして往なす？」

ギョウターが静止する。今の彼の双瞳には仮想の敵が写っている。身長は自身と同じ、性能は自分より上、この儂に近付く程、八極拳を極めた男……

「……………」

仮想の敵は一直線にギョントアの心窩を狙う。愚直なまでに真っ直ぐ、しかし、その愚直さを感じさせない程のスピードと的確さを以て、彼の命を奪いに来る。

「はあっ！！」

敵の左肘の軌道を、横薙ぎに来た左拳が反らす。その儘、横薙ぎにした拳で、敵の顔に裏拳を御見舞いする……！

「ふう……………」

一通りやり終えたギョントアは、軽く息を抜き、姿勢を元に戻した。

「見事だ。敵が突きに来るのなら、その軌道を反らしてやればいい。その攻撃には直線の動作しかないから、それだけで十分隙を作れる。」

「でも先生には敵わないなあ。反らす前に、確実に頂肘を当てる為に、幾つか他の攻撃を組み合わせるでしょ？」

ふ、と儂も息を抜く。コイツはどうして、この歳で素晴らしい活眼を持っているのだろうか。

「ふふ、よくぞ見抜いた。そう、俺なら更に二撃組み合わせる。」

「で、どんなの？」

ギョントアは期待に目をキラキラさせている。それに応えるべく、儂は構えを取った。

「先ずは一つ目、把子拳！」

右足を震脚させ、大地より帰ってくるその反動と共に左足から前に飛び込み、砲弾の如く左の拳を打ち出す。この時の足運びを？馬歩？と呼び、この瞬間、己の視界にはこの左拳を受け止める仮想敵の姿がある。

「二つ目、寸勁！！」

右足を左足に寄せ、？虚歩？と呼ばれる姿勢を取る。其処から更に左足を撃ち出し、残しておいた左拳を、一撃目を止めた敵の防御に向けて更に撃ち込む。此処までの経過時間は約0・5秒弱、敵はこの一撃に困り、その防御に隙を見せる。

「最後、裡門頂肘！！」

再び右足を左足に寄せ虚歩。今度は右掌を右脇下から差し込み、撃ち出した左拳に合わせる。其処から更に左足を撃ち出し、伸ばしていた左腕を曲げ、防御に見えた隙を潜り、敵の心窩を左肘で撃ち貫く……！！

「……ふう、これぞ八極拳が奥義、『猛虎硬爬山』だ。」

「すげえ……すげえよ、先生！！」

姿勢を正し、周囲を見回す。撃ち抜かれた空気が未だ鳴動している。足元には震脚で踏み抜かれた石畳の残骸。成る程、この世に帰ってきてから一年経つが、やはり注意しなければ斯様に物を破壊してしまう。いやはや、この？サーヴァント？とかいう身体は、些か性能が良過ぎるようだ。しかも？受肉？とかいうおまけつきで。

「むう、これは住職に申し訳が付かなくなるな……」
「あ、オレが片付けますよ。」

そう言つて、手早く砕かれた石を掻き集めるギョンター。だが、自分でやっておいて自分で片づけないのは儂の仁義に関わる話だ。此処は俺も手伝つとしよう。

「むん。俺もやらねば気が済まん。」

「おお、先生手際がいい……最初の頃とは大違いだ……」

「ふ、一年間も斯様な事態が度々起きれば、儂とて慣れるというも。寧ろ、こうして手に就く技が増えるのが儂の望みでもある。」

儂は死ぬ間際に、新しい技を習得できないのが残念だ、と悔しがつた。そして巡り来た二度目の生、謳歌せずして何が人が。今後は、積極的に俗世の事も学んでいきたい。

「しかし、ギョンター。お主のあの拳は何なのだ？」

「へ？」

「此処のところ、忙しくてゆっくり話をする機会も無かつたのでな。いい機会だ、お主のその蛇が如き拳の事を教えてくれ。」

「……………」

ギョンターが俯いてしまった。いつもの元気な少年は消え去り、彼の周りには虚無感が漂い出している。

「どうした？ 言い難いのであれば言わなくても別に叱らんぞ？」

「オレは……………」

ギョンターは語りだした。俯いた儘、声に感情を乗せずに。

「……お父さんとお母さんを、この手で殺したんだ。」
「……………」

周囲の空気が一変する。儂の心眼が告げていた。これから語られる話は、お前の信念に訴えかけるものだ。

「オレは、戦争の多い場所で生まれた。母親は日本人で父親がドイツ人。二人共、戦場で人々を助ける御医者様だった。」

たまにはある事。戦時中、同志として出会った者同士が結婚するのは、たまにはある事だと、儂は知っている。

「内戦が少し収まった辺り、オレはお母さんたちが建てた学校に行つた。けど、やっぱり貧しくて、食べ物も少なくて……オレは、早くこの内戦が終われば、皆、普通に生きていけるのに、とか漠然と考えてた。」

たまにはある事。紛争地帯の子供で、少しは自分に余裕を持てる者が考えそうなことだ。

「ある日を境に、内戦がまた始まった。生活はもつと苦しくなつて、友達が一人、また一人と死んでいった。」

よくある事。そんなことは普通に起き得るし、現在でも起きている。

「そんな中、オレは力が欲しいって、思うようになった。唐突に、うん、ある日突然。」

よくある事。自分の周りから仲間が消えていくのなら、自分がそ

れを止めればいい、と考えるのは道理である。

「そんなことを考えてた時、オレは？力が欲しいんだろう？と、誰かに言われた気がする。それはその通りだし、この戦いが早く終わるなら何でもしてやるって、思ってた。」

よくある事。こんな状況では、少年兵が徴兵されるのも、また戦場ではよくある事。

「気付いたら知らない場所にいた。変な薬……みたいなものを飲まされて、何が何だか分からなくなった。そんなことが何回か続いた後……気付いたら目の前でお母さんとお父さんが死んでた。」

これは余り無い事。何が起きたのだろう。彼を懲役したのは、軍の類ではないという事か。薬に因って前後不覚にさせ、無理矢理、魂に彼の拳が為すあの技を刻み込んだのだろう。成る程、確かにそれなら、この歳でこの強さを誇る訳である。

「オレは本当に訳が判らなくなった。その後、何人殺したのかは判らない。気付いたら、いつもの知らない場所において、手だけが血だらけの時とかもよくあった。そんな生活を送る内に、オレは心の方が先に死んでいった。」

何と言う事か。意識を混濁させられていたとはいえ、両親をその手に掛け、その後も幾人もその拳で屠ったのか。彼らに何かをした者共は、相当な手練の暗殺集団なのだろう。

「でも、内戦は直ぐに終わった。それが去年の初め。仕事が終わるとオレは、まるでゴミでも捨てるかのように、この国に置き去りにされた。小さい頃から日本語は聞いていたから、判らない訳じゃ無

かったけど、人を殺すことしか能の無いオレに、生きる術なんてなかった……」

「が、そこに儂が現れた。」

「うん。初めは少しびっくりしたよ。何せ、今まででオレの拳を受けて死ななかつた唯一の奴だつたんだもの。」

そして、儂との生活が始まる。双方共に、殺すことしか能が無い者たちだつた為、初めの内は、山に入って熊を狩りながら、修業をしていた。そんな折、儂らを拾ってくれたのが、柳洞寺の住職である。彼は儂らに食事と寝床と修業場所を用意してくれた。御仏がこんなにも素晴らしいものだ、儂はこの時初めて知つた。

その後、住職の知り合いで、冬木を仕切っているという任侠の親方の助力もあり、ギョウターを年相応の学校へ行かせることが出来た。最初こそ不安であつたが、彼の楽しむ姿を見て、儂の不安は杞憂であつた事を思い知つた。

「やれやれ、何故儂がお主に引き当てられたか、これではつきりした。」

「?????」

「お主は友や父母を思うが故に力を求めた。だが、手に入れたのは人を活かす力では無く、人を殺める力。それを悔やんでおるのだから。」

「うーん、よく判らないけど、そうかもしれない。」

「なれば儂も同じこと。儂は身内や兄弟を護るために、この殺人拳を極めたのだ。即ちギョウター、これは何を意味している?」

「うーん………判らない………」

儂は足元の瓦礫を片付け終え、儂は立ち上がって背伸びをする。受肉している分、普通の肉体のように疲労が溜まることがたまにあ

るのだ。

「それはな、お主の拳も窮めれば人を護る力になる、という事だ。人を護った殺人拳の使い手が言うのだから、間違いはない。」

「そうか、オレも護れるのか……」

ギョントアの頬が緩む。いつもの元気澆漑な少年が戻りつつある。

「うむ、そうだ。だが、それには鍛錬が必要だ。窮めれば、或いは儂に届くやもしれん。」

「本当！？ よぉ〜し、オレ頑張っちゃうぞ〜！」

ギョントアが笑う。まるで春先の太陽のような笑顔に、若干酔いしれている自分がいた。

「む………？」

「？ どうしたの、先生？」

「ギョントア、住職に、今日は遅くなると伝えてくれ。儂は少し用事が出来た。」

「え、そうなの？……判った。じゃあ、今日の鍛錬は此処までだね。」

「ああ、続きはまた明日だ。今日は早く寝ておくように。」

「うん、お休み、先生。」

寺社の方に向かっていくマスターを見送った後、山門の方へ歩き出す。

「これは戦の予感……今、ギョントアを危険に曝すことは出来ない。」

幸い、自分は完全に姿を消すことが出来る。この身はアサシンのサーヴァント、李書文。例え受肉しようとも、我が『圏境』は健在だ……

「さて、参るか……」

……姿は疎か、気配すら掻き消えている。山野の獣たちですら、今の儂の存在には気付くまい。完全に自然と一体化した李書文は、不穏な気配のする場所へと、急ぎ向かうのであった……

【玲慈と綾嶺のies 舞台裏 couliesses】

玲「どうも、紫苑 玲慈です。」

綾「蘇芳宮 綾嶺です。」

玲「厭々まさか、前篇後篇に分かれるとは、流石のオレも思わなんだ。」

綾「作者曰く、『予告した内容まで乗せようとしたら、今までの倍ぐらいの長さになってしまったので、仕方無く二つに分けた』そうだ。」

玲「やれやれだ。まあ取り敢えず、書文先生マトリクスの情報をどうぞ。」

【クラス】アサシン

【マスター】桂 義雄太

【真名】李書文

【生別】男性

【身長・体重】184cm / 66kg

【属性】中立・中庸

【ステータス】

・筋力：B

・耐久：C

・敏捷：A

・魔力：E

- ・幸運：E
- ・宝具：C+

【クラス別スキル】

気配遮断：

サーヴァントとしての気配を絶つ。

完全に気配を絶てば発見することは不可能に近い。

だが、彼の持つ気配遮断はそれらのどれにも該当せず、姿を目視不能にすることすら可能。

更に、自らが攻撃行動に移ってもこの気配遮断の性能は全く落ちない。

【固有スキル】

中国武術：A+++

宇宙と一体になる事を目的とした中華の武術をどれ程極めたかの値。

習得の難易度も最高レベルで、Aでようやく？習得した？と言えるレベル。

A+++ともなれば達人の中の達人。

圏境：A

気を使い、周囲の状況を感じし、また、自らの存在を消失させる技法。

極めた者は天地と合一し、その姿を自然に透けこませる事すら可能となる。

このサーヴァントの『気配遮断』スキルはこの技能に因るもの。

心眼（真）：B

修業・鍛錬に因って培った洞察力。

自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、その場に残された活路を導き出す？戦術理論？。

逆転の可能性が1%でもあるのなら、その作戦を実行に移せるチャンスを手繰り寄せられる。

宗和の心得：B

同じ相手に同じ技を何度使用しても命中精度が下がらない特殊な技能。

攻撃が見切られなくなる。

玲「……勝てる気がしない……」

綾「アサシンのサーヴァントとしては反則級だな。攻撃行動に移っても性能の落ちない圏境に因る気配遮断、心眼（真）に因る戦況把握・戦術構築、宗和の心得に因って敵はいつまで経っても攻撃を見切れない……」

玲「並みのサーヴァントじゃ勝負にすらならないんじゃないか？」

綾「一方的に屠られるのがオチだな。対抗手段としては、Aランクを越える直感や千里眼で、攻撃そのものを先読みするしかない。ただ、姿も気配も完全に消し去っている相手への攻撃手段があるならの話だが。」

玲「……寒気しかないな。では此処で、前篇の後書きに書いたアーチャーの情報を振り返ってみたいと思う。」

【クラス】アーチャー

【マスター】萩野谷 沙織

【真名】ロビンフッド

【生別】男性

【身長・体重】173cm / 72kg

【属性】中立・善

【ステータス】

・筋力：C

・耐久：C

・敏捷：B

・魔力：B

・幸運：B

・宝具：B

【クラス別スキル】

対魔力：D

シングルアクション

— 工程による魔術行使を無効化する。

魔力除けのアミュレット程度の対魔力。

単独行動：A

マスターからの魔力供給を断つても自立できる能力。

ランクAならば、マスターを失っても一週間は現界可能。

【固有スキル】

破壊工作：A

戦闘を行う前の準備段階で相手の戦力を削ぎ落とす才能。

ランクAならば、相手の進軍前に六割近い兵力を戦闘不能にすることも可能。

ただし、このスキルのランクが高い程、英雄としての霊格は低下していく。

精霊の加護：B

精霊からの祝福に因り、危機的な局面に於いて優先的に幸運を呼び寄せる能力。

その発動は敵に認知されていない状況のみに限定される。

千里眼：C

視力の良さ。

遠方の標的の捕捉、動体視力の向上。

仕切り直し：C

戦闘から離脱する能力。

また、不利になった戦闘を開始ターンに戻し、技の条件を初期値に戻す。

玲「……スキルの相性が良過ぎやしないか？」

綾「言えてるな。上記の通り、破壊工作のスキルは戦闘開始前の準備段階で敵の戦力をボロボロにしてしまう恐ろしいスキルだ。百人いた仲間が、気付いた時には四十人まで減っている、何て事もあり得る。」

玲「でもこれ、対個人では扱い辛いんじゃないかな？」

綾「厭、そうとも言えない。削ぎ落とすのは飽く迄？戦力？だ。上記の例では軍隊に於ける兵力で説明をしているが、対個人、特にサーヴァントが相手であれば、敵の？性能？を？戦力？として見做して削ぎ落とす。」

玲「つ、つまり……？」

綾「彼がその気になれば、戦闘前に敵サーヴァントの性能が約60%は削り取られることになる。」

玲「……コイツにも勝てる気がしない……」

綾「人間の癖に宝……おっと、これはネタバレになるのかな？」

玲「なります（語尾強め）。港での戦いの翌日まで待つてください。では、先生のマスターであるギョウター君の情報もどうぞ。」

【名前】 桂 かつら 義雄太 ギョウター

【誕生日・血液型】 3月5日 / O型

【生別】 男性

【身長・体重】 157cm / 50kg

【イメージカラー】 ブライトゴールド

【属性】 土

【特技】 我流拳法

【好きなもの・苦手なもの】 師匠、瞑想 / 術数権謀

【天敵】 複雑怪奇な策略

【概略】

・年齢は物語登場時点で9歳（誕生日で10歳）。顔立ちはそれに整っている。髪はショートで金色、瞳は空色。服装に頓着はしない。生まれは中東で、両親は内戦中に野戦病院勤務の医師として知り合った二人。父親がゲルマン系で、母親が日系。幼い頃に反政府系の組織に攫われ、殺人兵器として仕立てあげられる。久宇 舞弥とは境遇も生まれた場所も近い。根は純真な年相応の少年だが、殺人に掛けては超一流で、彼はそれをコンプレックスとしている。アサシンと出会ってからは、そのコンプレックスも解消しつつある。魔術は使えないが、魔術回路は開いている為、修業すれば魔術も使用可能になる。属性は五行説の土。彼の起源は『正義』。

玲「……舞弥さんとの絡みが気になるところだ。」

綾「生まれ故郷も境遇も近いから……では、次回予告と洒落込み
ますか。」

次回予告

Le rideau s'ouvre?

幕は上がった。

Hostilité? souverteés tharromperie

開かれたのは、偽りの戦端。

Le plumeux v'écrit avec un char?

黄金の輝きと共に、最古の王は再臨する。

次回、Fate/Rhapsodie Lunaire

『6 . pr?lude/hostilité? s ouvertes
de la tromperie』

……王の中の王、彼は孤独の中に一人取り残された……

Roids rois ilair? la r'annsla solitude

06 . . . prélude/hostilités ouvertures la troupes
 【陸・前奏曲／偽られし 戦 端 を 開く】

「あそこか……」

不穏な気配は、南東にある豪邸からだった。全体を見渡せる位置に陣取る。

「（この気配は……儂と同族がいるか？）」

儂が陣取ったのは、山の上を通る道路の下、急斜面の崖の上である。儂とは些か仕組みが異なるが、それでも？姿を掻き消している？輩が、儂の頭上に向かってくる。

幾ら他人が姿を隠そうとも、儂は既に自然の一部……気配を消そうとしている気配も、手に取るように判る。……む、頭上に気配を隠せない人間がいるな……

「聖堂教会から七体目のサーヴァント・キャスターが現界したとの連絡があつた。」

低い男の声。その服装は、所謂、僧服カソックという神に仕える者が着る服だ。黒と紺の糸で縫い上げられたそれは、神の威厳を示すものだというが、この男からは悪の気配しかしない。

「最後のサーヴァントが召喚されましたか。ではいよいよ……」

その男の後ろに、黒い人影が現れる。間違いない。あれは儂と同じ暗殺者だ。その姿には若干の疑問を抱いたが、恐らく彼の方が正式な暗殺者なのだろう。つまり、儂はイレギュラーという事だ。そもそも、儂はランサーのクラスで召喚されるのが正式であり、アサシンとして召喚されたのは、？ランサーが既に召喚されており？『圏境』という魔技を有している？という条件が整っただけなのだろうが、今は与り知らぬことである。

「そう言う事だ。早速だがお前にはこれから、遠坂邸へ向かってもらおう。」

黒い男は既に、かなり下の道路に降りている。相当な距離が開いているが、『圏境』が効いているなら確たる問題にはならない。後ろの男の声と前の暗殺者の声、双方に聴覚を集中させつつ、音も風も立てず、暗殺者を目視できる距離に降り立つ。

「……と、申しますと？」

「お前なら、あの遠坂邸の要塞のような魔術結界、恐るるに足りぬだろう。」

「……ふっふっふっ、よろしいのですか？ 遠坂 時臣とは同盟関係と聞いておりましたが……」

「（ほう……裏切りか……厭、決め付けるのは早計というもの。暫し、見守らせてもらおうか……）」

暗殺者が最後の崖の上に立つ。その崖の真下には、目標である遠坂邸とやらがあるようだ。

「それは考慮しなくていい。例えアーチャーと対決する羽目になるうとも、恐れる必要は無い。」

黒い男は言い切った。これには何か企みの匂いがする。

「三大騎士クラスのアーチャーを恐れる必要は無いと仰るとは……」
「任せたぞ。速やかに遠坂 時臣を、抹殺しろ。」

暗殺者が崖下の森に飛び込む。儂は崖の上から、観察に相応しい場所を探す。

「（あの、庭の街灯の上がよさそうだな。このような正式な暗殺者で恐るるに足りぬというなら、イレギュラーな儂なら、躲す必要すらあるまい）」

再び足を踏み出す。下の暗殺者を上回るスピードで、音も風も立わず、塀の上の生垣に降り立ち、そこから庭に据え付けられた街灯の上に飛び乗る。

「（さて、同族のお手並み拝見だ……）」

空中に躍り出た暗殺者の得物は指弾。小石を撃ち出し、魔術結界を発生させているであろう紅玉ルビーを撃ち抜いていく。これで、奥の花畑は安全地帯となった。その花畑の一つの飛び込む暗殺者。ゆらりと持ち上げた黒い顔に、白い髑髏の面が映える。

「（ふむ……しかし、正式の同族にしては些か……）」

気配が異様だ、と考える直前、暗殺者が動いた。狙うは目の前の芝生の中に立つ石の正対称形シンメトリーの彫像オブジェの塔の中に仕込まれた、大粒の紅玉ルビー。

目標を中心に円を描くように薄らと見える結界に向けて、指弾を

一発。未起動だった結果が発動する。しなやかな足取りと舞のような身の熟しで回避していく。例えるなら……黒豹のようだ。目標の目前、止めとばかりに指弾を、的確に散布する。すると、そこで境界は攻撃性を無くした。

「（む……上手く行き過ぎだな……）」
「他愛無い……」

儂は疑問を残した儘だが、暗殺者は勝ち誇ったかのように大粒の紅玉ルビーに手を伸ばし、それをその手中に……

「ぐわあっ！ あああっ！！」
「（ぬっ……何奴……！？）」

……できなかった。代わりに、その手は彫像オブジェに礫レズになっている。鋭い長槍によって……

「あ、ああ………」
「地を這う虫螻風情が、誰の赦しを得て面を上げる！？」

残虐そうな声……否、この声は残虐そのもの。手を礫レズにされた暗殺者に、破壊の暴風が襲い来る。

「（あれを……）」

暴風の発生源に視線を向ける。質実剛健とした洋風の屋敷、その切妻屋根の頂。そこには……

「（……恐れることは無い、だと……？）」「」

……黄金の男と光る壁、そこから現れる無数の武器を視た。

「ぐわあー!!」

降り注ぐ剣や槍。一つ一つに莫大なエネルギーが秘められているのか、着弾と共に大地を削り、吹き飛ばす。それは暗殺者を完膚無きまでに撃滅した。

「（……何と言う……）」

言葉には出来ない。そこには結果があるのみ。この争いが意図的なものだったとしても、この黄金の男に、真正面から挑んでも勝算は薄いという結果が、そこに視えただけ。

「貴様は我を見るに能わぬ。虫虻は虫虻らしく、地だけを眺めながら……」

その黄金の男は、屠殺した暗殺者の亡骸を蔑むように眺めながら

……

「……死ね。」

そう、冷たい声で言い放った。

† † †

遠坂邸の庭先で黒き暗殺者が撃滅された日の丁度一年前。遠坂邸の地下工房では、英霊召喚の準備が整えられていた。

ただ、繰り返される刻を破却する。」

更に二節。スロットル回転数は臨界に達しつつある。

「告げる。」

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄る辺に従い、この意、この理に従うならば応えよ。」

エンジン魔法陣は最高回転数。フルスロットル状況は悪く無い、寧ろいい。

「誓いを此処に。」

我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ

「！」

急速な魔力の収束。エーテル体の構築。そこから更に実体化……
現れたのは、黄金の鎧を身に纏いし男。黄金の髪を獅子のように逆
立て、その双瞳は冷徹な赤を湛えている。

「皆の者、この戦い……」

その者はウルクの暴君、人類最古の英雄王、世界の全てを手にし
た男……その名を？ギルガメッシュ？……！

「……我々の勝利だ！」

「……はあぁうっ！?!?!?」

一瞬、場が凍結した気がする。この男、まさか時間操作の使い手
とか……

「エ……エ……」
「ど、どうなされたのかな、王よ。」

恐る恐る聞いてみる。それでも優雅さを崩さないのが、遠坂家の男というものだ。

「……エルキドウ！ 何故此処におる！？」
「「「はあっ！？！？」」「」」

直後、絶句は必須であった。しかしどういう事だろう。私は彼以外のサーヴァントの召喚などしておらぬし、此処に彼の親友が何故……？

「王よ……残念ながら、我が召喚に応じたのは、王、貴方様のみでございませう。貴方様の御親友は……」
「戯け！ 貴様の眼は節穴か？ 睨しゅっかと其処におるではないか。その……なんだ、黒い男たちに挟まれて……」
「「……え？」」

綺礼と璃正氏が同時に自分の脇に視線を落としたのは言うまでもない。そこには、我々の協力者、萩野谷 沙織が目をぱちくりさせて突っ立っていた。

「おお、その瞳、その髪、その顔……かなり子供だし、些かみすばらしい感否めんが、この小娘は紛うことなくエルキドウだ。でなくば、その生れ変りしか考えられん！！」

ババーン、と効果音が入ったような入っていないような……にしても、彼女がかの英雄王の親友……に似ているのだろうか。勿論私は、彼の記憶など見ることも恐れ多くて不可能なので、永遠に真

相は謎ではあるが……

「うむ、その力強い眼光、我^{オレ}は忘れてはいなかったぞ。」

この王は、沙織の瞳を見詰めながらそう言った。

「更にこの艶やかな銀の髪、元来の色は消え去るうとも、この輝きは変わらない。」

この王は、沙織の綺麗な髪をサラサラと撫でながらそう言った。

「そしてこの精巧に作り込まれた人形のような貌！ うむ、全てに於いて、この小娘はエルキドゥ、厭、寧ろその生れ変わりである！！」

そして言い放った。この少女は自身が生涯で唯一信じた者の生まれ変わりであると。

「王よ……」

「ん？ どうした雑種。今の我^{オレ}は非常に機嫌がよい。申してみよ。」

「恐らく沙織は少々対応に困っていると思われませう。」
「……………」

事実、彼女は困惑しているようだった。それもその筈、英霊の召喚に付き合ったと思ったら、現れた金^{金が集まりそう}ひかの英霊に良いように遊ばれているのだ。これで困らなければ、それは最早、鼻のいい守銭d……げふんげふん……。

「ほう、沙織というのか、今のエルキドゥは。」

「いえ、ですから……」

「ギルガメツシュ……」

そうしては彼女の為にはなりません、と言いかけた時、彼女が初めて言葉を発した。……え、何故に真名？……

「おう、ようやく我の事が判ったか。」

「ああ。でも、今は自分の事がよく判らないんだ。」

「口調変わつとる……」

思わず突っ込みが三人で八モってしまった。誰と八モったかは言うまでもあるまい。それ位、彼女の変わり様は激しい。……ギャツプ萌えでも狙っているつもりなのだろうか……それでは今度凜にも……

しかし、どうにも展開に付いていけない。もしも彼女が本当に彼の親友の生れ変りであったとして、何故その時の記憶が戻るのだろうか。本人と生れ変りは別人の筈だ。確かに、前世の自分を降霊・憑依させることで、かつての記憶を習得させるという魔術は存在するらしいが……

「はっはっはっ、よいよい。今の今まで、全く別の人間として暮らしていたのだろうか？ であればそれは至極当然の事。少しづつ思い出していけばいい。何、猶予に期限は無しだ。我はいつまでも待つぞ？」

「……じゃあ、親友の誼についていう事で、待っていてくれ。」

「構わぬ。我は朋友に関する事には寛大であるからな！ はっはっはっはっはっはっ……ところで、我を現世に呼び付けた不届き者……否、今は功勞者であるか……兎も角、それは誰だ？」

「私、遠坂家当主、遠坂 時臣であります。」

「うむ、トキオミよ。本来ならば詰まらぬ戦に手を出してやるなど

以ての外だが、今はその無礼、水に流そう。何せお前は、エルキド朋友の生れ変りの目の前に我を召喚するという偉業を成し遂げたのだからな。

「それは光栄で御座います。我が王よ。」

「……では、私はこれで失礼する。必ずや、その手に聖杯を。」

「……御安心下さい、璃正殿。では。」

全員が解散した後、私が床に就けたのは、午前の三時の事であつた。

因みに、ギルガメッシュは沙織を『友の誼』とやらで、彼女の工房へ返してあげたらしい。……やれやれ、最強のサーヴァントであるとはいえ、非常に御し難い駒を吊り上げたものだ。これも遠坂家我が血筋に伝わる呪いうっかりというものなのだろうか……

キキキ

夜の遠坂邸。書斎には遠坂 時臣が一人、ワイングラスに注がれた赤い液体を眺めながら、月明かりの中、佇んでいた。

「……さて、首尾は上々と……」

「随分と詰まらない些事オレに我を煩わせたものだな、トキオミよ……」

突如、黄金の光の粒子が窓際に収束し、形を成した。

「恐縮であります、王の中の王……英雄王、ギルガメッシュよ……」

時臣は黄金ギルガメッシュの王に対し、臣下の礼を執った。……明らかに立場が

逆だ。今の彼は時臣マスタに使役されるサーヴァントの筈である……

金に包まれた王は、傳く時臣の方に視線を向ける。

「今宵の仕儀は、英雄王の威光を知らしめ、更に狩り落とす獅子がどれなのかを見定めるべく、今後に備えた露払いでございます。どうか今しばらくお待ちを……」

「ふ……良かろう。」

今宵、一体のサーヴァントが撃滅された。遠坂邸に侵入した黒き暗殺者。それを英雄王は、圧倒的殲滅力を以て抹殺したのである。

「まだ当面は、散策だけで無聊を慰められそうだ。この時代、中々どうして面白い……」

「お気に召されましたか？ 現代の世界は……」

「度し難い程に醜悪だ。……が、それはそれで愛でようもある。肝心なのは、此処オレに我の財に加えるに値するだけの宝があるかどうかだ。」

そう言い切った。『だが朋友の生れ変りが元前世を取り戻すに戻るのも重要ではあるが』とも、その表情が暗に付け加えている。

「もし我が寵愛に値する宝モノが何一つ無い世界であったなら、無益な召喚オレで我に無駄足を踏ませた罪は重いぞ……トキオミ……」

英雄王が時臣に視線を突き刺す。だが彼には隠し玉がある。それは沙織だ。彼女は彼の親友の生れ変りであるらしい。もし聖杯が彼の気に召さなかったとしても、彼女が前世の記憶を完全に取り戻してくれれば、恐らく自分に降り懸かる火の粉はあるまい。と言っても、単なる保険でしかないのだが。

「御安心を。聖杯は必ずや、英雄王のお気に召すことでしょう。」
「……それは我が検めて決める事……まあいい、当面はお前の口車に乗ってやろう。」

カシャンカシャンと、貴金属が当たる高貴な音を残しながら、彼は窓際から離れた。彼の言う当面とは、彼女が前世ネオジの記憶を取り戻すまでの間だろう。そうなれば、最早彼は時臣に従う必要など無くなる。彼女が彼の一番の理解者になるのだ。時臣から強引にマスター権を移すことも辞すまい……

「この世の全ての財宝は私のもの……その聖杯がどの程度の宝であれ、私の赦しも無しに雑種が奪い合うなど見過ごせる話では無いからな。……トキオミ、委細は任せておくぞ。」

そう言い残した黄金ギルガメッシュの王は、その身を金色の光の粒子に変えて、その場から立ち去った。残された時臣は、緊張の糸が解けたように、ふう、と溜息を吐いて、書卓の椅子に腰を落とした。

「やれやれ……全く……選りに選ってギルガメッシュが、単独行動スキル保有の弓の騎士クラスアーチャーに現界するとは……」

王が立ち去った書齋で、独り言ちる時臣。しかし、その優雅さは相変わらず冴えている。

「まあ、当面のところは綺礼に任せておけばいい。今のところは、予定通りだ……」

時臣が視線を向けた庭には、隕石が落ちたかのようなクレーターが一つ、出来上がっていた……

【玲慈と綾嶺のles coulisses 舞台裏】

玲&綾「lescoulisses舞台裏、始まるよー!」「」

玲「……という訳で、どうも毎度御馴染み、黒の法術師（キラッ）
、紫苑 玲慈で御座います。」

綾「……凄まじい勢いでギャグに走ったな……どうも、蘇芳宮 綾
嶺です。」

玲「厭、それも致し方無いっちゃあ致し方無いのさ。だって、今回
オープン開示する情報マトリクスが無いだろ?」

綾「……それはそうだな……」

玲「で、どうやって尺を取ろうかなあ、と思案した結果がこれだよ。
オープンもう開示できる情報マトリクスが無い回は、オレたちで漫才やる外ほかに無い訳さ。」

綾「……むう、確かに悩ましい問題ではあるな。では、仮にワタシ
等で漫才をやるとして、どっちがボケでどっちがツッコミなんだ?」

玲「どっちもどっちなんだよなあ……取り敢えず、オレがボケでお
前がツッコミか?」

綾「ワタシにツッコミの才能があるとは思えないが……」

玲「厭、何かお前は条件反射でツッコミをしそうだ。まあいいや…
…取り敢えず、オレはテキストにボケてみる。」

綾「判った。ワタシもできる限りで頑張る。」

玲「オーケー、その調子だ。じゃ、やってみますか。」

十
十
十

玲&綾「「どうも！ 舞台裏の二人です。」」

玲「いやあ、しかし面白いね。あのアニメ。」

綾「いきなり何の話をしているんだ？ そんな脈絡も無しに言われ
たって誰も気付きやしないぞ。」

玲「この小説の原作の話。」

綾「ああ、F a t e / Z e r o の事か。ワタシは虚淵氏の原作小説
を呼んだことが無いのだが、それでも十分楽しめるようになってい
るな。取り敢えず、あの黒いバーサーカーのカッコ良さは異常だ。
スタッフの愛を感じ取れる。」

玲「オレはアーチャー押しだな。あの傲岸不遜なところが却って良
い。」

綾「ぬ、貴様……第五話の如く真つ向から対立する心算か？
」

玲「宜しい、なら戦争だ。実体化せよ、バーサーカー！」

バ「……………」

綾「ちょっと待て！！ お前アーチャー押しじゃなかったの！？
というか、何故舞台裏にバーサーカーが！？ 更に言うと、盛大に
ネタバレしてないですか！？」

玲「詳細は数話後に明かされる。そんな事より、其処な雑種を叩き
のめせ、^{狂犬}バーサーカー！」

バ「……………」

近くに置いてあったパイプ椅子を宝具化して襲い掛かるバーサー
カー

綾「ちょ、お前が英雄王になってどうする！？ 仕方が無い……………来
てくれ、^{ガウエイン}セイバー！！」

^{ガウエイン}呼び出されたセイバーが剣でバーサーカーの一撃を受け止める。

ガ「御無事ですか、^{マスター}我が王！？」

玲「ふつ、狂犬に忠犬とは良く言ったものだ。」

綾「お前は好い加減、^{我様}AU モードを^{レジスト}解呪しろ。キャス狐呼び付け
るぞ？」

玲「……………ゴメン、それだけは勘弁して……………」

綾「あっさり^{レジスト}解呪した！？ 他愛ねえな、^{我様}AU モード。」

玲「どうだったよ?」

綾「悪くは無かったな。ワタシも、意外と楽しめたし。」

ガ「あの、私は此処にいてよろしいのですか? ネタはもう終わったようですが……」

玲「別にいいよ。オレも次回辺り、タマモを連れて来ようかな。」

綾「一つ聞きたいんだが、何でお前は常時、自分のサーヴァントを連れ歩いてないんだ? 敵に襲われた時とか、どうする心算つもりなんだよ?」

玲「オレ一人でもサーヴァントに立ち向かえるから。というか、此処が舞台裏だから連れてきてないだけなんです……」

綾「まだ描写はされてないようだけど、夜中は市内の巡回とかもしてるんだろ?」

玲「まあ、其処はタマモの固有スキルを見てくださいれば判る事さ。」

綾「固有スキル……?」

【固有スキル】

怪力：B

魔物、魔獣のみが持つ攻撃特性、一時的に筋力を増幅させる。

使用する事で筋力をワンランク向上させる。

持続時間は?怪力?のランクによる。

言語理解：B

動物たちの言葉を理解することが出来る。

呪術：EX

西洋の魔術とは異なる術法の大系。

自身の肉体を媒体にして発動させるのが特徴。

その為、術が失敗した際の代償は全て発動した術者に降り懸かる。

変化：A

他人に憑依、変身する能力。

『借体成形』の別名を持つ。

他人の身体に入り込み、その姿を完全に模写、身体から抜けた後に変身することが出来る。

綾「ん？……？他人の身体に入り込む？……ってことはまさか！？」

玲「そう……巡回中、タマモはオレと？同化？している。御蔭で、紫苑 玲慈に化ける？事に関しては右に出る奴がいない。」

綾「成る程……ワタシ等のサーヴァントは受肉しているから霊体化が出来ないけど、スキルを使えば如何様にでもなる、って事か。」

ガ「ただ、私の？聖者の数字？は、この戦争の性質上、殆ど死にスキルになっけてしまいますね。」

綾「昼間しか効果を発揮しないもんなあ……ま、逆に考えれば、昼間でも人の目を憚らずに戦える場所さえ見つけければ、先ず負けるこ

とは無いということだな。」

玲「じゃ、話も一段落付いたところで、次回予告をしましょうか。」

次回予告

Lesortrythmique
運命の律動。
Tous les enregistrements commencent
全ての歯車が稼働を開始する。
Icine nous allons commencer la guerre du Saint Graal
さあ、聖杯戦争を始めよう

次回、Fate/Rhapsodie Lunaire

『07. Rondeau/lesortrythmique』

Ainsi le cloche d'ouverture
……斯くて、開幕の鐘は鳴り響いた……

07・rondeau/le sort rhythmique

07・rondeau/le sort
【漆・輪舞曲/運命 律動】
rhythmique

「サーヴァントを消失。マスターの権利失効に類し、聖杯戦争は継続不能。……」

時臣がアーチャーギルガメッシュに臣下の礼を以て対応していた頃、冬木の東南、新都の郊外、小高い丘の上にある冬木教会の門を叩く男が一人。

「……約定に従い、言峰 綺礼は、聖堂教会に因る身柄の保護を、要求します。」

あの黒い暗殺者を遠坂邸の差し向けた男、名は言峰 綺礼というようだ。

「受諾する。監督役の責務に則って、言峰 璃正が、貴方の身の安全を保障する。さあ奥へ……」

形式張った挨拶を交わした後、彼を教会の中に招き入れるのは、恐らくは彼の父親だろう。名は言峰 璃正というらしい。

「父上、誰かこの教会を見張っている者は……？」

「無い。此処は中立地帯として不可侵が保証されている。余計な干渉をしたマスターは、教会からの諫言がある。」

「では、安泰という事ですね。」

「うむ……」

礼拝堂の中は、その構造上、音が良く反響する。彼らは安泰だというが、綺礼かれを尾行してきた李書文わしが、堂々と一番後ろの参列席の端に座り込んでいる時点で、彼らの言う安泰は成立しない。もし、儂が正規のサーヴァントとして参戦しているなら、この時点で彼らは終わったも同然である。

「念の為、警戒は怠るな。常に一人は此処に、配置するように。」
「……は、畏まりました。」

彼が背後に声を投げ掛けると、そこに黒い影が現れた。露出が多い中東の踊り子のような服装。しかし、その地肌はあの黒い暗殺者と同じく、黒に染まっている。

「（矢張り、な……でなくば、特攻にも似た奇襲を仕掛ける筈が無い。……厭、消されるのが彼の役目だったということか……？）」

詰まる所、あの有様を他のマスターに見せ付けるのが目的か。アサシンのサーヴァントが脱落した、と見ていた者に誤解させ、同時にあの黄金のサーヴァントの性能を知らしめる……この暗殺者アサシンは増殖する力を持っているのだから、最低限の犠牲で、一石二鳥の働きを為すことになる。

「現場の監視をしていた者は……？」
「私が確認したところ、異なる気配の使い魔が四種類……」

儂の事は察知されていないようだ。間諜の英霊たる正規の暗殺者アサシンのサーヴァントであっても、儂の『圏境』を見抜くことは叶わぬらしい。

「一昨日、最後のサーヴァント・キャスターの現界を確認した。此

度の聖杯戦争のサーヴァントは、全て出揃っている筈だが……」

「……一人足りないか。出来れば、全てのマスターに見せておきたかったところだが……」

「今の局面で、御三家の邸宅を監視することは、マスターとして当然の策でございます。」

……また一人増えおった。今度は全身をローブで全身を覆った巨漢の男。祭壇への参道に立っている。

「その程度の用心も怠るような者であれば、どの道我ら暗殺者を警戒する神経など持ち合わせておりますまい……くっふっふっふっ……」

……さらに一人。椅子に座っている為に、儼のいる場所からは姿が見えない。

「暗殺者が排除されたものと油断しきっているマスター達の背後に」

……三人目。ローブの大男の傍らに、背丈の小柄な者が現れた。

「……我ら、影の英霊は……」

……どんどん増えていく。筋肉質な男、陰気そうな雰囲気の女など、その姿は千差万別だ。

「……今度こそ、本物の影になる……」

……増殖が終わる頃、礼拝堂には、様々な姿の暗殺者が七十八人、

影のように佇んでいた。

「これで戦端は開かれた。いよいよ始まるぞ、第四次聖杯戦争が…この老骨も、今度こそ奇跡の成就を見届けられそうだな。」

「……………」

……父の璃正が感慨深く語る中、子の綺礼は、何やら思い詰めるように俯いていた……

十 十 十

冬木市。市の中心を流れる未遠川を挟んで東側は？新都？と呼ばれ、古風な街並みの多い西側の深山町とは対照的に、近代化が進んでいる街だ。中高層ビルが幾つか立ち並び、専らオフィス街として機能している。駅前には高層ビルが建設中であり、完成すればその高さは冬木一だ。

「わぁ……………」

街並みをきよろきよろと、その好奇心旺盛な輝く瞳で眺めているのは、美しい女性。白銀の髪に雪のように白い素肌……何より目を引くのは、紅玉のような赤を湛えるその双瞳である。凡そ人ではありえないその容姿は、この極東の地方都市に於いて、苛烈なまでの異彩を放っている。

「ほら見て、これなんて貴女のイメージにぴったりよ。」

「そうでしょうか？ 私はそう言うのに関して疎くて……………」

そんな美女に付き従うのは、フレンチコンチネンタルのダークス
ーツを着込んだ美少年……厭、男装の美少女と言うべきか。輝く金
の髪に翡翠色の瞳、その凛々しい顔立ちや立ち振る舞いからは、?
騎士?という言葉が連想される。淑女レディを護衛する騎士エスコート、といった感
じだ。

「しかし、アイリスフィール……矢張り我々は目立ち過ぎている気
がする。」

「いいのよ、セイバー。どこかできっと切嗣も見ているわ。」

アイリスフィールと呼ばれた女性は、彼女がセイバーと呼ぶ美少
女と共に、活気溢れる街並みを進む。陽は西の山に沈みかけており、
空は綺麗な橙色に染まっている。

「そうだわ!」

「……?」

何かを思いついたのか、その身をフワツと躍らせて振り向き、数
歩後ろのセイバーに近付いて、その両手を掴むアイリスフィール。

「海に行きましょう、セイバー!」

「……は、はい。」

その儘、セイバーの右手を引っ張って、走り出すアイリスフィー
ル。その姿は、淑女レディと騎士ナイトというより、恋人同士のように見えた。

冬木市の海岸。未遠川河口の東側にあるその砂浜からは、冬木市
の海の玄関たる商港を垣間見ることが出来る。低く昇った月が海面
にも光を投影し、視界は青白く朧げな輝きに包まれている。

「素敵……まるで、夜空の合せ鏡みたい……」

アイリスフィールはそう呟くと、ブーツと靴下を脱いで、夜の水辺で波と戯れ始めた。

その姿を眺めるダークスーツの騎士^{セイバー}。その後姿には、哀愁の類が感じ取れる。

「殿方に付き添われて、見知らぬ街を歩くのは、とても楽しいわね。」

「殿方の紛い物で事足りましたか？」

「非の打ち所も無かったわ。今日の貴女はとっても素敵な騎士^{ナイト}だったわよ。」

満面の笑みを浮かべながら、アイリスフィールはそう、セイバーに言葉を返した。心做しかセイバーの頬も、若干緩んでいるように見える。

「光荣です、姫。」

臣下の礼を執りながら、頭を下げるセイバー。その動作には淀みが無い。彼女は女性であるようだが、生粋の騎士でもあるようだ。

「セイバー、海は好き？」

漣^{なみなみ}の音を聞きながら、アイリスフィールはそう訊ねた。

「好きと言われると、どうだか……私の時代の、私の国では、海の彼方は常に異敵の押し寄せてくる場所でしたから。忌々しく思う事はあっても、憬れたことはありません。」

言葉の一部に若干の違和感を覚えたが、その気持ちは俺にも理解できた。俺の時代も、海の外には敵しかいなかったと、獅子心王リチャードに聞いたことがある。……尤も、俺の時代では、その外敵も単なる侵略の対象でしかなかったらしいが……

「何だか申し訳無いわ。貴女だって同じ女なのに……アーサー王として生きてきた貴女には、こんな風に楽しむ余裕なんてなかったのよね……」

何と、彼女はかのアーサー王であったか。この俺が知らない筈はない。何せ、自らの十字剣に、彼女が持つとされる星の聖剣の名を付けて愛用した男と、共闘したことがあるからだ。それはもう、毎晩の如くアーサー王伝説の話が聞かされたものだから、逆にトラウマになっている位だ。しかし、アーサー王は女性だったのか……確かに、選定の剣を引き抜いてからは成長が止まり、少年の容姿の儘王として働いていたとは聞いていたが……

「……アイリスフィールこそ、本当は私ではなく、キリツグと街を歩きたかったのではないですか？」

「……あの人は……駄目よ。辛い思いをさせてしまうわ。」

顔には出さないが、声に思い詰めたような気配を感じ取れる。それを聞いたセイバーは、若干驚いた表情を見せた。

「キリツグは、貴女と過ごす時間を楽しまないのですか？」

「あの人は幸福であることに、苦痛を感じてしまう人だから……」

声のトーンを若干落として、アイリスフィールは答える。月の光

に照らされた彼女の表情から、既に笑みは消えていた。

「……………」

「……………」

しばしの沈黙。それを破ってアイリスフィールドの腕をセイバーが掴んだ。

「……………敵のサーヴァント？」

「はい。百メートル程先の物陰から、気配を漂わせています。……
どうやら、我々を誘っているようですね。」

「(さて、状況が動き出したか…………)」

冬木港に聳え立つデリッククレーンの上。俺…………ロビンフッドは、偵察中に街中で彼女らを発見し、海に出てからは此処で彼女らを視ていた。弓の騎士アーチャーの千里眼は伊達では無い。4〜5キロ離れた位置からでも、目標の表情から唇の動き、僅かな動作に至るまで、明確無比に視えてしまう。

「律儀ね、戦う場所を選ぼうって訳…………お招きに預かるとする？」

「…………望むところです。」

彼女のその言葉に、一瞬啞然としたセイバー。だが、直ぐにその表情が悦を帯びたものに変わる。その表情は、この俺もよく知る？騎士？のそれであった。

「らいだあ……早く、降りよう……ここは……」

未遠川に掛かる冬木大橋。大型のダブルアーチ橋であるこの橋のアーチ部分の一番高い所、普段ならば人のいるのがあり得ない場所に、二つの人影があった。

「……早くう！」

一つは団子虫のように縮こまって震えている少年。隣にいるもう一つの人影に、必死に降りようと懇願している。

「ん、くう……何を言う。見張るには逃え向きの場所ではないか。」

もう一つは、赤い鋼のアーチの上にとっかかりと胡坐を掻いて座る筋肉質の大男。このような高さなど無いに等しいとばかりに、焼酎を瓶の儘、豪快に呑んでいる。

「うわ……降りる！ 厭、降ろせ！……も、もう嫌あ……」

「落ち着きの無い奴め。座して待つのも戦の内だぞ？」

少年は高所恐怖症なのだろう。一刻も早く、この地獄のような高所から逃げ出したいに違いない。一方の大男は身動きもしていない。

「帰りたい……イギリスに帰りたい……」

「そう急くなと言っておるうに……ほれ、状況もようやく動き出しそうだぞ。」

「うう……？」

「ぬうっはっはっはあ……盛り上がってきたわい！」

彼らの見下ろす場所。冬木港の倉庫街。コンテナが規則正しく並

べられた通路に、二つの影が歩み寄っている。

「……………」

僕も行動を開始する。純白のタウブをはためかせ、萌黄色の長髪を靡かせ、海から吹き上げる風を全身に受けながら、争いの舞台へと疾風のように突き進む。数秒後、全体が良く見渡せて、同時に姿も隠せる場所を見つけ出した。

『よくぞ来た。』

僕の隠れた方から人影が歩み出た直後、通路に軽やかな声が響き渡った。

『今日一日、この街を練り歩いて過ごしたものの、どいつもこいつも穴熊を決め込むばかり……………』

声が反響を失って、徐々に声に重さが増してくる。

「……………俺の誘いに応じた猛者は、お前だけだ。」

歌うようだった声は重みを増し、更に殺気が乗せられてきた。事実上の宣戦布告である。

「その清澄な闘気……………剣セイバーの騎士とお見受けしたが、如何に？」

「如何にも。そう言うお前は、槍ランサーの騎士に相違無いな？」

「ふっ……………これより死合おうという相手と、尋常に名乗りを交わすことも儘ならぬとは……………興の乗らぬ縛りがあつたものだ。」

実に残念そうに、ランサーは独り言ちた。どうやら彼は生粋の騎

士であるようだ。

「……………」

その両の手に握られた二本の槍を振り回し、独特の構えを取った。膝を僅かに曲げ、二本の槍を翼のように構える……其処に、槍の翼を持った鳥が舞い降りた。

「……………」

「わぁ……………」

思わず感嘆の声が出てしまう。黒スーツ姿だったセイバーが光と魔力の渦に包まれたかと思うと、彼女は青と銀のドレスメイルに身を包んだ騎士に早変わりしていた。

「セイバー、気を付けて……………私でも治癒魔術位のサポートは出来るけど……………でも、それ以上は……………」

「ランサーはお任せを。ただ、相手のマスターが姿を見せないのが気懸かりです。妙な策を弄するかもしれない……………注意しておいてください。」

セイバーは、その手に何かを握っていた。目視は出来ない。ただ、ボクの野生の勘が、あれは剣の類だ、と告げていた。

「アイリスフィール……………私の背中中、貴女にお任せします。」

「判ったわ。セイバー、この私に勝利を！」

「はい、必ずや。」

こうして、戦いの幕は開かれた。轟音を立て、運命の歯車Fateが動き出した気がした……………

07・rondeau/le sort rythmique (後書き)

【玲慈と綾嶺のles coulisses 舞台裏】

玲&玉&綾&ガ「舞台裏、始まるよ!!」

玲「はい、そう言う訳で、今回も舞台裏が始まるよ。」

綾「……何だか人数が多いような……」

玉「はいはい! 私、タマモノマエ玉藻前と申します。私の愛する御主人様マスターの為に、今回からレギュラらせてもらうことになりました!!」

ガ「れ、れぎゆら、ら?……と、兎も角……私、ガウエインも、今回からレギュラーとして舞台裏に参加させていただくことになりました。どうか宜しくお願い致します。」

玲「さて本編の方は、遂に本格的な戦いが始まったな。」

綾「ランサーVSセイバーの戦いだな。因みに、アニメの第三話の終わりの部分が、この回の終わりとなってる。」

玉「ねえ、御主人様。更新が今までより若干遅くなったみたいですが、何か聞いてませんか?」

玲「作者曰く?書き溜めで時間を食ってしまった?との事だ。実際、今は第七話の真ん中まで話が進んでいるようだな。裏では。」

玉「さっさと書き上げてしまえばいいものを……!!」

玲「其処、呪符を握り締めない。」

ガ「実際、七話は細かい描写が素早く展開しますからね。更にこの小説では、私たちのような受肉サーヴァントが、七騎もいますから。作者さんの苦勞はよく判ります。」

綾「で、もう話すことが無くなりかけてるが、どうする？」

玲「面倒だから漫才する。」

綾「面倒だからって……」

十十十

玲&綾「「どうも、舞台裏の二人です。」」

玲「はあ……」

綾「……いきなりどうしたよ？」

玲「家の掃除が大変過ぎる……」

綾「……え？」

玲「だから、家の掃除が大変すぎるんだよお！！」

綾「お、お前んち、骨董屋だろ？ そんな叫ぶほど大変か？」

玲「骨董屋とか一階とか二階とかは問題無いの！ 酷いのは……地

下だ……」

綾「地下って、お前も地下に工房を用意したのか？」

玲「ああ……」

綾「そんなに大変なものか？ 保存の魔術を掛けておくとかすれば、埃とか溜まらないぞ。」

玲「取り扱いが面倒臭いマジックアイテム魔術用品の在庫置き場にもなってるんだよ。下手に魔術とか掛けられない。それに……広いし……」

綾「広いつて、どのくらい？」

玲「マウント深山商店街と同じ位。」

綾「……それでは広いわ……」

玲「だから、だからこそ！ 家事専門のメイドゴーレムとかブラウニーとか欲しいと思ってしまったんだよお……」

綾「……一つ思ったんだが……」

玲「何を思ったんだ？」

綾「何故式神に頼らない？」

玲「……」

綾「……」

玲「盲点だった！！！！」

綾「本当に気付かなかったのかよ！！！？？」

十 十 十

玲「本当に疲れるんだ、あれは。」

綾「もう御愁傷様としか言いようがない。」

玉「もう、御主人様だったら。私に言いつけてくだされば、全部やって差し上げますのに……」

玲「厭、下手すると商店街が吹き飛びかねないような代物も収めてあるから。楽した代償に街を吹き飛ばしたりしたら、それこそ目も当てられん。」

綾「完全に伏魔殿と化してるんじゃないのか、お前の工房は……？」

ガ「あの、そろそろ次回予告に言った方がいいのでは……？」

玲&綾&玉「……」「……」「……」

ガ「あ、あの……？」

玲「……忘れていました。では次回予告をどうぞ。」

次回予告

Sabret Lanceur de
 剣と槍、両雄相対する。
 Commarrest une arme de
 響く剣戟は芸術の如く。
 Le publictrapidans l'obscurité?

次回、Fate/Rhapsodie Lunaire
 08 . rondoayglaimeventwanned
 捌・輪舞曲/風の剣、薔薇の槍「前篇」

……月明りの中、激しく美しく、舞い踊る……

08・rondeau / glaiive de vents, lance de
 【捌・輪舞曲 / 風の剣、薔薇の槍「前篇」】

第四次聖杯戦争。聖杯を巡る四回目の戦いの火蓋は、冬木市の北冬木埠頭の近くにある倉庫街で切って落とされた。コンテナの並べ立てられた通路に対峙するのは、二人の英霊。

「（むう、一人は二槍の使い手……ランサー槍兵のサーヴァントか。対するは……あの手に持つ得物は恐らく剣……なれば騎士か。）」

いざ尋常に、と構えを取った二人は、直後、堰を切ったかのように突撃した。響き渡る剣戟の音。二人の技量は拮抗している。……厭、若干だが槍の方が有利か？……

李書文わしが立っているのは、船からコンテナの積み下ろしをする為の、巨大な機械仕掛け。俗にはデリッククレーンというらしいの上に立ち、二人の戦を見物している。因みに、マスターとは、バスレイラインを利用して感覚を共有し、この戦場を見せている。

「ねえ、先生。」

「（どうした？）」

マスターの声が頭に響く。離れていても意思疎通が可能なところが、これの最大の利点だ。

「今、クレーンの上には何人いるの？」

「（儂のいる方に一人、隣に二人……儂も含め、四人だ。一人は人

間……令呪が見えるからマスターだろう。後二人の内、一人は確実にサーヴァントだ。昨日、教会で見たあの増えるアサシンの一人だな。恐らく他の場所にも何人かいると思われる。」

『もう一人は？』

「（残念ながら判らん。人の気配はするが、姿を完全に隠している。恐らく魔術礼装か何かなのだろうが……ここまで完全に姿を消す魔術礼装なぞ、果たして存在するのだろうか……）」

場所は判る。極限まで抑えられているが、微かに気配が感じ取られる。見ているものは儂や他の二人と変わらないだろう。しかし、見事な隠れっぷりだ。サーヴァントの宝具であっても、此処まで見事に姿を消すというのは至難の業である。無論、我が『圏境』は尺度に入っすらいないが。

「（む、宝具？……奴もサーヴァントだろうか……？）」

……にしては気配が人に近しすぎる。サーヴァントであれば、霊体化が可能な為、若干ながらも魔力やエーテルの気配が感じられるというもの。それが全くない。儂のように、受肉でもしなければ……

「（まさか……儂と同じだということか……？）」

……まあ、いい。今は目の前の戦いが重要だ。

そうこうしている内に、二人の戦いは佳境に差し掛かっていた。ランサーは長さの違う二本の槍を驚異的な膂力も以て巧みに操り、セイバーはその手に握る？視えない剣？で間合いを図らせない。双方共に、敵には回したくない技量の持ち主であることは明白だ。

「（しかし、ランサーのあの槍……何か引っかかる……）」

二本とも呪符が巻かれており、その全容は知れない。恐らく宝具なのだろうが、開帳していない為、その機能が発動していないのだ。一体、どのような機能の宝具なのだろうか……？

「……うがつー！」

直後、背後から悲鳴が聞こえた。あの増えるアサシンの一人が、何かに身体を貫かれ、クレーンの下へと落ちていく。落ちる一瞬間、その頭と胸に？矢？が突き刺さっているのがはっきりと見えた。

同時刻、丘の上の冬木教会。地下の霊廟にて、僧服姿カソックの男が一人、瞑想するように目を閉じて立っている。

「……未遠川河口の倉庫街で、動きがありました。いよいよ、最初の戦闘が始まったようです。」

『最初という言い分はあるまい。公式には第二戦だよ、綺礼。』

男の名は言峰 綺礼。師である遠坂 時臣と共謀し、アサシンの一人を捨て駒にして、アサシンの敗退を？演出する？事に成功している。

「戦っているのは、どうやらセイバー、それにランサーの様です。」
『アサシンの眼からでも、サーヴァントのステータスは読み取れるか？』

「問題無く。取り分けセイバーは能力値に恵まれています。大方の

パラメーターがAランク相当と見受けます。」

『……成る程な、流石は最強クラスといったところか。ランサーよ
りセイバーの方が厄介そうだな。……マスターは視認できるか？』

目の前の骨董品から声が聞こえてくる。どう見ても古風な蓄音機
からターンテーブルを取り除いたような不完全品だが、これを貸し
与えた時臣師曰く、魔術的な通信機なのだという。音を出す機構は
正に蓄音機のそれだが、針に振動を伝えるのは、溝が刻まれたLD
ではなく針の部分に仕込まれた大粒の宝石だというから、矢張り、
如何わしいことこの上ない。

兎も角、今、綺礼は冬木教会の地下霊廟にしながら、港の戦闘風
景を眺めている。サーヴァントの感覚共有がこれを可能としている
のだ。そして綺礼は、その戦闘風景を師の時臣に余すことなく伝え
ているという訳だ。

「堂々と姿を現しているのは、サーヴァント以外では一人だけ……
セイバーの背後に控えています。銀髪の女です。」

セイバーから見て守られる立ち位置。サーヴァントは基本、マス
ターを守り抜かなければならない為、恐らくは彼女がセイバーのマ
スターなのだろう。少なくとも、現時点では他にマスターらしい人
物は見当たらない。

『ふむ、ならばランサーのマスターには身を隠すだけの知恵がある
と……素人では無いな。この聖杯戦争の鉄則を弁えている。……待
て、銀髪の女だと？』

時臣が言葉を制止する。

「はい。白人の女です。」

「……………」
「……銀髪に、赤い瞳……………どうにも、人間離れした風情に見えますが……………」

敢て言葉にするのなら、人形……………生きた人形といった感じだ。人形に命が吹き込まれて、自分で歩いて喋っているかのように、綺礼には思えた。

「……アインツベルンのホムンクルスか？ またしても人形のマスターを铸造したのか……………ユーブスタクハイトが用意した駒は、衛宮切嗣だとばかり思っていたが、まさか見込みが外れるとはな……………」
「では、あの女がアインツベルンのマスターなのですか？」

綺礼は、何だか熱を奪われたような気分陥った。衛宮 切嗣がマスターでは無い。彼は切り札では無かった。それだけで、何故だか自身の中のやる気が失せていつている事に気付いた。勢いよく肩透かしを喰らった気分と、似ていると言えば似てるのかもしれない。

綺礼は、時臣が調べていた衛宮 切嗣の経歴を見て、何故か彼に惹かれた。

最も魔術師を知るが故に、最も魔術師らしからぬ方法で、目標の魔術師を追い詰める、？魔術師殺し？の異名を持つ男……………

狙撃、毒殺、公衆の面前での爆殺、目標が乗り合わせたというだけで旅客機ごと撃墜……………戸惑わず、躊躇わず、誇りを持つことも無ければ、悲しむことも無い。ただ、目標を殺すだけの冷徹な機械……………

そんな男の戦いは九年前に唐突に幕を閉じた。北の魔術師、アイ

ンツベルンとの邂逅により、恐らく彼は答えを得たのだろう。ならば問わねばなるまい。その戦いの果てに何を求め、何を得たのかを……

『兎も角、その女は聖杯戦争の趨勢を握る重要な鍵だ。綺礼、決して目を離すな。』

「了解しました。では常時、一人を付けておくことに……ぐあっ！」

言い切る前に、左胸と頭を激痛が走り抜けた。純粹な傷に因る痛みでは無く、傷口を焼き尽くすような熱の感覚を伴うもの。……これは、毒の類だ……堪らずクレーンの下に落下するアサシン。視線を向けたその胸には、？矢？が突き刺さっていた。

アサシンは海に落下。しかし身動きが取れない。全身の筋肉が細かく痙攣して言う事を聞かない。海中である為、息をすることも不可能。やがて遠のくように意識が離れていき……

……次の瞬間、額に当たった硝子が割れるような得も言われぬ感覚と共に、アサシンとの感覚共有が解けた。

『どうした、綺礼！？』

「……感覚を共有していたアサシンが、何者かに因って撃破されたようです。」

『何だと……？』

あの瞬間の痛みは、アサシンが感じたものが感覚を共有していた私にフィードバックしたものだ。心臓と脳幹、的確無比に射られたそれは、若干の機能を残した儘、鏃に塗られていたであろう毒を以て冒し、身体を自由を奪い、そして死に至らしめた。アサシンは下

手人を見ていない。正に完璧な暗殺。暗殺者を暗殺するなど、下手人は一体何者なのだ……？

「時臣師、アサシンを穿つたのは？矢？です。しかも、鏃に毒が塗られた？毒矢？を、背後から撃ち込まれたようです。」

「？毒矢？……そんなものを使うサーヴァントが、今回の聖杯戦争で現界している可能性があるのか……？」

遠坂師の疑問も尤もだろう。矢を放つのは主に弓の仕事。弓矢を宝具とするなら、それ即ち弓兵のサーヴァントという事になる。だが、英雄王は既に召喚されている。ではこれはどう言う事か。

「時臣師、これは一体……？」

「ふむ……飽く迄推測だが、サーヴァントには複数のクラスに就ける英霊も確かに存在する。かの英雄ヘラクレスは、ありとあらゆる難行を成し遂げた男だ。その為、キャスターを除く全てのクラスでの召喚が可能なんだ。」

「つまり、複数のクラスに就ける可能性のある英霊が、別のクラスで召喚され、アーチャーのクラスとしての宝具を使ったと？」

「飽く迄推測の話だよ。倒されたアサシンは下手人を見ていないのだから、どの道、警戒を強化するしかやりようが無い。」

アサシンは背後から撃たれていた。つまり、同じ立ち位置にもう一度アサシンを配置することは、単なる命取りという事でもあるか。

「承知しました。配置を変えて、引き続き戦闘の監視を続行します。」

他のアサシンと感覚を共有し、指示を出して、再びセイバーとランサーの戦いを凝視する。

そんな中、有り得ない筈の存在の登場が、自身の心臓の鼓動を早くしていることに、綺礼は若干の困惑を抱いていた……

冬木商港、デリッククレーンの上。熱感知スコープと暗視スコップのオプションを装備したワルサーWA2000を手に、衛宮 切嗣は、確認したランサーのマスターらしき人物を狙撃しようとしていた。

「……………ん？」

狙撃の際、自身の周囲を警戒するのは定石である。それに従い、暗視スコップで周囲を見渡すと、有り得ない存在がスコープを通して視えた。

「アサシン……………？」

昨日、遠坂邸で撃破された筈の間諜の英霊^{アサシン}。黒いローブに髑髏の仮面を付けたそれは、自分がいる場所の隣のクレーンに音も無く佇んでいる。

「舞弥、中央のクレーンの上を確認してくれ。アサシンがいる。」
「……………こちらでも視認しました。ですが、どうして死んだ筈のアサシンが……………？」

「矢張り裏があったな……………この場は一先ず様子を見よう。引き続きアサシンを監視してくれ。僕はランサーを見張る。」

「私がアサシンに攻撃を仕掛けて、注意を引き付けているその際に、ランサーのマスターを……」

「駄目だ、舞弥。あそこに陣取ったのがアサシンだという事が問題だ。今我々には、対サーヴァント戦の備えが無い。」

「……判りました。」

マスターの狙撃は、いざとなればどうという事も無い。だが、自分の陣取る場所の直ぐ側にサーヴァントがいるとなると、話は別だ。どう足掻いても銃の発射音や閃光は消しきれないし、もしこちらを気付きでもすれば、その時点で我が陣営は崩れ去る事になる。此処は状況を静観するしかなさそう……

「……うがつ!!」

「……!？」

……状況が動いた。素早く声のした方へスコープを向ける。捉えたアサシンは、背中から頭部と心臓を矢で貫かれており、その儘、クレーンの下に落下した。

「何が起きたんです？こちらでは視認が出来ませんでした。」

「アサシンが何者かに撃たれた。凶器は矢、恐らく狙撃だろう。僕から見て十時の方角だ。舞弥は死角になる位置に入って待機。」

「了解。」

しかし、判らなかつた。矢が遠方から飛んでくるなら、風を切る音が耳に入る筈。それが一切無かつた。まるで、アサシンの身体の中から矢が飛び出たような……

「……どっちにしろ、今回は狙撃を諦めるしかなさそうだな……」

相手が矢を用いる狙撃手であるなら、分厚い建物を壁にすれば届くことは無い。だが、どうにも腑に落ちない。安全であるという認識に間違いが生じているような……

……何にせよ、その時が来てみなければ判らないか……と、あらゆる雑念を払って、眼下の戦闘に集中する。

「……では、お手並み拝見だ。可愛い騎士王さん……」

08 · r o n d e a u / g a i v e d e v e n t s , l a n c e d

……後篇に続く……

【玖・輪舞曲／風の剣、薔薇の槍「後篇」】
09・rondeau/glaive de vents, lance de

「（やれやれ……特等席はもう満員だったの……）」

幾ら、俺の宝具『森 王結 界』が光を歪曲させて自身の姿を完全に隠せるとはいえ、それにも限界というものがある。俺は受肉しているからサーヴァントとしての気配は発していない。とはいえ、俺に気配遮断のスキルは無いから、長いこと本業の暗殺者が近くいられちゃあ、そのうちばれる危険性がある。幸いにも連中は、気配は消せても、霊体化意外に姿を消す手段が無いようなので、目視さえできれば、後はこちらの領域である。心臓と頭蓋に、的確無比に櫛の毒矢を打ち込んでおいた。数秒も経たない内に、アイツは消え去るだろう。これで、しばらく此処に現れる面倒な奴はいなくなつたな。

「（さてと……もうしばらくは高みの見物と洒落込みますか。）」

アサシンを射殺された気付いた奴は二人。一人は隣のクレインの上に陣取っている。まさか、死んだ奴の直ぐ傍に手下人がいるなんぞ、考えてもいるまい。月は出ているが、案外と深い宵闇に助けられた。

「名乗りも無い儘の戦いに、名誉も糞もあるまいが……兎も角、賞賛を受け取れ。此処に至って汗一つかかんとは、女だてらに見上げた奴だ。」

「無用な謙遜だぞ、ランサー。貴殿の名を知らぬとはいえ、その槍

捌きを以てその贅辞……私には誉だ。有り難く頂戴しよう。」

「（ふむ……さしもの騎士王様も苦戦なされる相手、か……こりゃあ、俺じゃ真つ向勝負は無理だな……）」

あの槍使い……中々に見事な武芸の持ち主だ。あんなスタイルの槍は初めて見る。俺には、騎士王様の？インビジブル・エア視えない剣？と同じ要領で姿を隠す？インビジブル・フォレスト視えなくなる外套？がある事にはあるが、真つ向勝負など以ての外だろう。……あの二本の槍、どんな機能の宝具なんだ……？

『じゃれ合いはそこまでだ、ランサー。』

「っ！……ランサーの、マスター！？」

「（お、槍兵ランサーの主人の御出座して訳か。）」

アイリ嬢が狼狽えている。声はすれども姿が見えないからだ。ま、要は前線には出て来ず、隠れて声だけ魔術で聞かせてるって寸法か。

「（けど、俺には視えてるんだよね……）」

奥の倉庫の屋根の上。金髪に厭味そうな目付きの男……恐らくはアイツがランサーのマスターだ。

『これ以上、勝負を長引かせるな。其処のセイバーは難敵だ、速やかに始末しろ。……宝具の開帳を許す。』

「……了解した。我が主よ……」

その声に従い、ランサーは短槍を地面に落とす、長槍を両手で構え、魔力を充填する。パラパラと剥がれていく呪符。現れたのは毒々しい程に真つ赤な長槍。

「……そう言う訳だ。此処から先は、殺りに行かせてもらう。」
「（あれが奴の宝具か……だが、何か引つ掛かる……）」
「セイバー、お前は束ねた風の魔力で、剣を隠した儘か？」

二槍を以て敵を圧倒していた槍使いが、突如として片方の槍を捨てた。これは何かの布石に違いない。捨てた方の短槍……あれは何だ？

「成る程、剣を覆い隠しておきたい理由が、お前にはあるということるか……お前の真名、その剣にあると見た。」

「残念だな、ランサー。貴殿が我が宝剣の正体を知ることには無い。その前に、勝負を決めて見せる……！」

先に動いたのは槍使いだった。セイバーに向かって歩いて行く。

「それはどうかな。視えない剣を暴かせてもらうぞ、セイバー！」

直後、ランサーは突きを繰り出した。愚直なまでの直線。だが、神速を以て放たれたそれは、閃光の如くセイバーに迫る。

槍を扱う武術の類に於いて、あらゆる他の動作はたった一つの攻撃へ繋げるための布石でしかない。槍に於ける究極の一、それは？ 刺突？を置いて他にない。必要最低限の動作を以て最速で放たれるそれを、回避するのは至難の業だ。況してや英霊ともなれば、その技量は既に人のそれを超越している。

しかし、対するセイバーもまた英霊である。彼女の技量もまた、人のそれを越えている。人の領域を突破した者同士の戦い。彼が放つ最速の一撃を、彼女は視えない剣で弾き返す……

「なっ！！」

「（おいおい……どうなってるんだ、ありや……？）」

……鋼のぶつかり合う硬質な音の後、異変は発生した。槍と剣を突き合わせた両者の間に、猛烈な風が巻き起こったのである。

「……曝したな、秘蔵の剣を……」

セイバーの？風王結界？は、莫大な量の大気を魔力で剣の前に纏わりつかせ、光の屈折率を変えて刀身を視えなくする宝具だ。つまり、剣を視られてしまったが最後、彼女の正体は一瞬ではれてしまう。それ位、？あの聖剣？は有名過ぎる代物だという事。

「？風王結界？が、解れた……！？」

しかし、奇妙なのはランサーの持つ朱槍である。どうやら、あの槍は？不可視の鞘？を削り取っているようだ。打ち合う都度に、その輝く刀身が露になる。

「刃渡りも確かに見て取った。これでもう見えぬ間合いに惑わされることは無い！」

「（……ちよっと、拙い状況だな、これは……）」

セイバーとランサーの間が離れる。ランサーは歩きながら槍を構え直した直後、突進。セイバーの狙いは、槍の穂先を鎧の脇腹に掠めさせ、その隙を討ち取る、といった寸法か。

「あっ！！」

「（は……？）」

そうしようとしたセイバーが、悲痛な声を漏らしながら、横に飛んだ。ランサーが朱槍の柄で二発、追いつきを掛ける。それを防いだセイバーの脇腹には、真っ赤な血の跡。ランサーの朱槍は、その穂先を血で染めている。

「……ふっ……」

「セイバー!!」

「(どうなっついていやがる……)」

アイリ嬢が治癒魔術を発動し、セイバーの傷が塞がっていく。脇腹に当てていた手を離し、再び両手で剣を握る。槍を受けた鎧は、血こそ付いているが無傷だ。

「有り難う、アイリスフィール。大丈夫、治癒は効いています。」

「矢張り、易々と勝ちを取らせてはくれんか。」

セイバーの動きは完璧だった。彼女に非は無い。恐らくは……

「(……あれがああ槍の性質……!)」

「そうか、その槍に秘密が見えてきたぞ、ランサー。」

「ほっ……」

「その赤い槍は、魔力を絶つのだな。」

彼女も気付いたらしい。

セイバーの鎧は魔力で編まれたものだ。その鎧に傷を付けたのか
と言えはそうでは無い。鎧に傷を付けず、その下の肉だけを斬り裂
いた。そして、打ち合う度に削れていく? インビジブル・エア不可視の鞘?……あの槍
は、魔力を断絶する類の代物……

「ふつ、その甲冑は魔力で精製されたもの……それを頼みにしていたのなら、諦めるのだな、セイバー。俺の槍の前では丸裸も同然だ。」

「高々鎧を剥いだ位で、得意になってもらっては困る。」

ランサーの言葉を聞いたセイバーはそう答えた。銀の甲冑は、同じく銀色の粒子となった霧散する。

鎧を解いたセイバーは、まるで青と白のドレスを着た戦乙女ヴァルキリーのようにも見えた。

「（駄目だ……槍兵アイツはまだ奥の手を隠している……）」

さつき捨てた筈の短槍が気に掛かって仕方が無い。だが、伝えようにも手段が無い。騎士の戦いに横槍は厳禁だと、獅子心王リチャードの奴にこっ酷く言われたことがある。

「防ぎ得ぬ槍ならば、防ぐより先に斬るまでの事……覚悟してもらおう、ランサー！」

「思い切ったものだな。乾坤一擲、と来たか……鎧を奪われたことの不利を、鎧を捨てることの利点で覆す……その勇敢さ、潔い決断……決して嫌いではないがな……」

不敵に構えるランサー。

「この場に限って言わせてもらえば……それは失策だったぞ、セイバー。」

「さてどうだか。諫言は、次の打ち込みを受けてからにしておらうか。」

剣は後ろに構え、前傾姿勢。防御を一切考慮しない、捨て身の
一撃。逆袈裟に剣を振り払い、一刀両断にするつもりだ。

直後、セイバーの背後に爆風が起きた。突撃。そう表現するのが
正しい位、一直線に突っ込むセイバー。？不可視の鞘インビジブル・エアを解除し、
押さえつけられていた莫大な量の大気を解放、まるでジェット噴射
のように利用したのだ。

「（拙い……それはいけない……奴の言う通り、それは失策だ……
！）」

蒼い砲弾と化したセイバー。決死の突撃を見据えたランサーは、
左の爪先を蹴り上げる。蹴り上げられたのは、先刻捨てた短槍。既
に呪符は解かれ、黄色いその姿を曝している。

空中を舞う禍々しい程に黄色の短槍。セイバーは最早、槍に突っ
込むしかない。止まる事は出来ない。砲弾は、進むしか、能が無い
……

交錯する二つの影。俺はその一つに、生前共に戦った、獅子の心
を持つ王の姿を重ねていた……

十 十 十

「つくづく、すんなり勝たせてはくれんのか……善いがな、その不
屈振りは！」

そう悪態を吐く槍兵ランサーの左腕の肘裏には、鋭い傷跡が走っている。

あの刹那の一瞬、セイバーは直進する身体を僅かに傾けた。体勢が流れたことで、ランサーの黄色い魔槍はセイバーの胸を貫くことは無く、その左肘の裏を斬り裂くに留まった。同時にセイバーは、ランサーの肘裏を斬りつけて見せたのである。結果、両者共に同じ場所に傷を負ったことになる。

『何を悠長なことを言っている。馬鹿が、仕留め損ねおって……』
「痛み入る……我が主よ。」

そんな声と共に、ランサーの傷は見る見るうちに閉じていく。どこかにいるマスターが治癒魔術を使ったらしい。

「……アイリスフィール、私にも治癒を……」
「かけたわ……かけたのに、そんな……」

アイリスフィールと呼ばれた白い女性が狼狽える。当然だ。セイバーの傷は、未だ癒えてはいない。

「治癒は間違いなく効いている筈よ。セイバー、貴女は今の状態で完治している筈なの……！」

セイバーは自分の左腕を見る。見た目の傷は浅く、出血も少ない。だが、親指が動いていない。どうやら、腱を斬られたようだ。

「我が『破魔の紅薔薇』ゲイ・ジャルクを前にして、鎧が無為だと悟ったまではよかったな……」

ランサーの口から、宝具の真名が明かされる。最早隠すまでも無いという事が。

「……が、鎧を捨てたのは早計だった。そうでなければ『必滅の黄蔷薇』は防げていたものを……」

そう囁いたランサーは、初めに見せた構えを取る。紅と黄……二色の槍を翼に持つ鳥。数多の戦、試練を潜り抜けてきた、必殺の構え。

「成る程……一度穿てば、その傷を決して癒さぬという呪いの槍……
……もっと早くに気付くべきだった。」
「ふっ……」

魔を絶つ紅槍、呪いの黄槍、そして乙女を惑わす左目の泣き黒子と来れば、該当する英雄はただの一人しかない。

「フィオナ騎士団、随一の戦士……？輝く貌？のデイルムッド。まさか、手合わせの栄に与るとは、思いませんでした。」

「それが、この聖杯戦争の妙であるうな……だがな、誉れ高いのは俺の方だ。時空を超えて？英霊の座？にまで招かれた者ならば、その黄金の宝剣を見違えはせぬ。」

槍の騎士……ケルトの英雄、デイルムッド・オディナ。

しかし、彼の顔に陰りは見えない。寧ろ、名前を隠す必要が無くなったことが、却って清々しいといった感じだ。

「かの名高き騎士王と鏖迫り合って、一矢報いるまでに至ったとは……ふふ、どうやらこの俺も、捨てたものでは無いらしい。」

剣の騎士……ブリテンの騎士王、アルトリア・ペンドラゴン。

黄金の宝剣を象徴とする剣の英霊など、そう滅多にいる者では無い。『エクスカリバー約束された勝利の剣』……その持ち主が誰か、答えられない者はそうおるまい。尤も、かの騎士王の正体が、こんな愛らしい少女であったなど、誰も知らない事ではあるうが。

「さて、互いの名も知れたところで、ようやく騎士として尋常なる勝負を挑める訳だが……それとも、片腕を奪われた後では不満かな、セイバー？」

「戯言を。この程度の手傷に気兼ねされたのでは、寧ろ屈辱だ。」

セイバーは再び鎧を身に纏い、残った右腕で剣を構える。黄金の剣は再び風に覆われて、その刀身を不可視にした。

「覚悟しろ、セイバー。次こそは殺ると！」

「それは私に殺られなかった時の話だぞ、ランサー。」

周囲に再び静寂が訪れる。殺気で充満した空間は、足を踏み入れただけで生き物を殺してしまいそうな位、空気が張り詰めている。さざめく波の音、戦ぐ風の音……それ以外は、一切の無音と化し……

「むっ!!！」

「あっ!?!」

「え……?」

……突如、非常識な轟音が、張り詰めた無音を破壊し、鳴り渡った。万雷の喝采にも等しいそれを放つ存在は、真の意味で雷を纏っている。

「A A A L a L a L a L a L a i e ! ! !」

チャリオット

「戦車!?!」

古風な戦車。躍動する逞しい筋肉を持った二頭の牡牛が引く戦車。チャリオット
牡牛の蹄と車輪から紫電を発し、夜の空を逞しく駆け降りてくる。

「双方、武器を収めよ！ 王の前であるぞ！！」

雷の如き大音声。王を名乗るその大男は、先刻、冬木大橋のアーチの上に座っていた巨漢だ。よく見れば、傍で震えていた少年も、御者台に乗って巨漢の傍に控えている。

彼らの位置は、セイバーとランサーの間。二人の戦いを邪魔する形になる。

「我が名は征服王イスカンダル。此度の聖杯戦争に於いては、ライダーのクラスを得て現界した！」

両腕を広げ、そう高らかに宣言した騎兵。ライダー その脇で、あの少年がぶるぶると震えながら、怒りの儘に叫びだそうとしていたのは言うまでも無かるう。

マトリクオープン
情報開示

『インビジブル・フォレスト
森 王結 界』

【ランク：C】 【種別：対人宝具】 【レンジ： 】【隠蔽対象：1
人】

彼がその背に羽織っている深緑のマント。

起動すると、光の屈折率を調節し、周囲の風景に透け込むことが
出来る。

ただし、彼には気配遮断スキルが無い為、その気配まで消し去る
ことは出来ない。

長距離での隠密行動、並びに至近距離での攪乱・奇襲に大いに役
立つ宝具。

次回予告

Roide l'Or
黄金の王。

Chien du noir
黒の狂犬。
L'enouvelinttrusva boulevard l'harmonie?tabeherattait?
新たなる闖入者が 運命の 予定 調和 を狂わせる。

次回、Fate/Rhapsodie Lunaire
『拾・輪舞曲/三人の王 「前 篇」』

Le rugissement des sonndammuitcreuse
……咆哮は虚ろな夜に響く……

【拾・輪舞曲／三人の王】前篇【
10・rondeaux/trois fois premier volume

「何を考えてやがりますか、この馬鹿はあああああ！！」

戦車の御者台に乗り合わせている少年が金切り声で絶叫した。状況を鑑みるに、恐らくあのライダーのマスターなのだろう。

「てえへっ！……うっ……」

マントに掴み掛ったその少年は、ライダーの太い指から放たれたデコピンを喰らい、悶絶している。この場にいる全員が、どうしていいか判らない、といった様子だ。

「汝らとは聖杯を求めて相争う巡り合わせだが……先ずは問うておくことがある。汝ら……」

堂々と語る征服王。一体何を問いたいというのだろうか……？

「一つ我が軍門に降り、聖杯を譲る気は無いか！？ さすれば余は貴様らを朋友として遇し、世界を制する快悦を共に分かち合う所存である……！」

「……………」

絶句。言葉を失うとは、正にこの事を言う。

セイバーもランサーも、この余りの突拍子の無さに追いつけない

でいた。

騎乗兵^{ライダー}……マケドニアの征服王、イスカンダル。

確かに、世界征服に最も近付いた男ではある。だが、この人を食った提案と無茶苦茶と言わざるを得ないその行動は一体何なのだろうか。

いきなり現れたかと思えば自ら隠匿すべき真名を曝し、拳句の果てに一戦を交えることも無い内から自分に仕えろと勧誘してくる。

……この破天荒さは英断か、それとも愚拳か……

「……その提案は承服しかねる。」

今まで口を出さなかったランサーがそう言った。どうやら、ようやく先程の調子が戻ってきたようである。

「俺が聖杯を捧げるのは、今生にて誓いを交わした新たな君主ただ一人だけ……断じて貴様では無いぞ、ライダー！」

「そもそも、そんな戯言を並べ立てる為に、貴様は私とランサーの決闘を邪魔立てしたというのか？ 騎士として許し難い侮辱だ。」

無表情で問いかけるセイバー。その視線には明確な憤怒が見て取れる。ライダーの提案が余程、癪に障ったようだ。

二人の殺気に挟まれたイスカンダルは、嶮谷を指で掻きながら、むう、と唸った。

「……待遇は応相談だが？」

「……諄い……」

彼の提案……と言っているのかどうかはよく判らないが、それは一瞬にして棄却された。根っからの騎士である二人にとって、尋常なる決闘を邪魔されるということは、相当な屈辱であろう。状況次第では二人が共闘してライダーに襲い掛かる可能性もありそうだ。

「重ねて言うなら……私も一人の王として、ブリテン国を預かる身だ。如何な大王と言えど、臣下に降る訳にはいかぬ。」
「ほう、ブリテンの王とな？」

ライダーは、セイバーのその物言いから彼女の正体を悟ったようだ。豪快に破顔するライダー。

「こりや驚いた。名にし負う騎士王が、こんな小娘だったとは！！」
「その小娘の一太刀を浴びてみるか、征服王！」

どうやらライダーの言葉は、彼女の怒りの琴線に触れたらしい。セイバーから放たれる殺気の濃密さが増大する。

「こりやあ交渉決裂かあ……勿体無いなあ、残念だなあ。」

この男、これを本気で交渉だと思っていたらしい。ライダー以外の恐らく全員が決裂して当然と思っているだろうが、当の本人は本気で残念そうだ。

「ら……いだあああ！！」

悶絶していた少年が、絶叫してから恨みたっぷりの視線をライダーに向けている。恐らく、この場にいる殆どの者が彼の存在を忘れ去っていたことだろう。デコピンを喰らった額は真っ赤になってお

り、その両眼には涙が溜まっている。

「どおすんだよ、征服だなんだと言いながら、総スカンじゃないかよお……お前、本気でセイバーとランサーを手下に出来ると思ってたのか？」

……思っていたのだろう。この男は恐らくそう言う男だ。

当のライダーは、格別悪びれた風も無く、相変わらず豪胆に笑っている。

「厭、まあ？ものは試し？と言うではないか。」

「？ものは試し？で真名ばらしたんかい！？ 大体お前は……」

……お前たちはどこの三流漫才師か。……と、この儂ですら心の中で突っ込む程、場の空気は弛緩していた。ここで問答無用に仕掛ければ、恐らく彼らは脱落する事になるのだろうが、騎士である二人はそんな不意打ちはしないだろうし、セイバーのマスターらしい白い女性は、どうしたらいいか判らない様子だ。

『そうか、選りに選って貴様が……』

「う……ああ……！」

怨嗟を含んだ声が、空間に響き渡る。再び緊張感に包まれる空気。この声は、ランサーのマスターのものだ。

『一体、何を血迷って私の聖遺物を盗み出したのかと思えば……選りにも選って君自身が聖杯戦争に参加する腹だったとはねえ、ウエイバー・ベルベット君……』

その声は、ライダーの戦車の御者台に乗る少年に向けられていた。彼がウェイバー・ベルベツトらしい。彼とランサーのマスターは、どうやら顔見知りのようだ。

『君については、私が特別に課外授業を受け持つてあげようではないか。魔術師同士が殺し合うという本当の意味……その恐怖と苦痛とを、余すところなく教えてあげるよ。光栄に思いたまえ。』

その声には、嘲りと嘲笑が多分に含まれている。ランサーのマスターは、ウェイバーの師匠のようだ。どういった経緯かは知らないが、ウェイバーは偶然、師匠が聖杯戦争に参加するのを知り、師匠の下に届く筈だった聖遺物も手にしていた。そして、彼は冬木へと飛び、ライダーを召喚。師匠は代用の聖遺物でランサーを召喚し、二人は此処に再開を果たしたという事になるのだろう。

その台詞は宣戦布告。傲慢で一方的、自身の勝利を信じて疑わないそれは、彼の為人を如実に表しているのだろう。恐らくは魔道の名門の出。歪んだ誇りと他人を見下す性根は、儂の嫌いなもの一つだ。

対するウェイバーは、顔色を青くして何か言い返そうとしている。だが、恐怖が先行しているのか、蹲すまって震え、何も言い出せないでいる。そんなウェイバーの肩に、ライダーの太く逞しい腕が置かれた。

「おう、魔術師よ。察するに貴様は、この坊主に成り代わって、余のマスターとなる腹だったらしいな。」

彼の師匠に言い返したのは、弟子のサーヴァントであった。

「セイバー、そしてランサーよ。汝らの真つ向切つての競い合い、真に見事であった。あれほどの清澄な剣戟を響かせては、惹かれて出て来た英霊が、よもや余一人ということはあるまいて。」

儂も含め、他の連中を知覚している訳では無いようだ。恐らくは、多分いてもおかしくは無い、位の勘だろう。

「聖杯に招かれし英霊は、今此処に集うがいい！ 尚も顔見せを怖じるような臆病者は、征服王イスカンダルの侮蔑を免れぬものと知れ！！」

……痛いな。実に痛い。この男、この戦争の意味を知ったうえで、それを言うのか。……彼のその言葉の直後、街灯の上に黄金の光が収束した。三人のサーヴァントを余すことなく見下ろせる位置。其処に現れたのは、あの時の黄金の男であった。

10. r r o n d d e a u / l e s t r o i s r o i s r r p r p r e r i e r

後篇へ続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5751x/>

Fate/Rhapsodie Lunaire

2011年12月11日19時47分発行